変人がAクラスに降臨しました

孤独なバカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文月学園Ａクラス

優秀な人ばかり集まるＡクラス次席は知名度が高い

文系はトップクラスで、運動神経もいい

しかし、観察処分者で授業中も本を読んでばかり、さらにバカと呼ばれる友達がいる

教師の評価も様々であり、優等生とも言えない

だがＡクラス首脳陣は一目をおいている主人公の物語

目　次

プロローグ及び設定 ―― 1
現状 ―― 4
進級 ―― 10
ＨＲ終了後 ―― 17
脅し ―― 25
妹 ―― 33
戦略と元恋人 ―― 38
飯 ―― 44
当たり前 ―― 48
宮田海 ―― 55
Ａクラス作戦会議 ―― 60
開戦前 ―― 69
Ｆクラス戦前半戦 ―― 75
Ｆクラス戦後半戦 ―― 81
戦後会談 ―― 89

プロローグ及び設定

春

桜並木が並び俺はのんびり今日から通う文月学園に向かっていた
桜の甘い香りと平和な雰囲気を感じながら俺は学園へと向かう
文月学園
最新鋭の学校システムを持っている学校であり全国有するの国が支援している学園らしい
俺は学力テストは正直文系特化で数学に限ったら下の中レベル
今回の入試でも国語と社会と英語はトップで数学と生物以外の理科は下から数えた方が早かった
「ふぁ～新天地はやっぱり違うな。」
俺はそのシステムを使うためにわざわざ田舎から出てきたので都会の景色に少しワクワクしていた。
まぁ、どうやら昔の祖先がどこかの地主だったらしく今はその土地の一部を使って両親が農家を務める程度だった。
金銭面でも余裕があり月の振込も少し多めに振り込まれている
そんなわけで夢見たいな一人暮らしをしている訳なのだが、ぶっちゃけ暇だ。
昔から両親の手伝いをしていた時間がまるっきし空くのだから当然なのだから当然なのだが
そんなことを考えながら俺は学園に向かうとそこには大勢の生徒で溢れていた
うわ～すげぇ多いなぁ
そんなことを考えながら俺もその間に入る
俺はそして受付を済ませ体育館へと向かう
どうやらクラス割よりも入学式を優先する学校らしくクラス分けを後回しにするらしい
そして入学式が開始されると、眠気が訪れる
とどこも入学式や卒業式のダラケテいるのは同じらしく学園長とかお偉いさんの話をグダグダと聞かされるばかり

面倒くさいなぁと思っていると
「変態だ!!!」
と大きな声が聞こえてくる
すると急に騒がしくなるが別にどうってことはない
目を瞑ると睡魔がやってきてそのまま意識を暗闇に任せた
入学式が終わりしばらくたって俺は生徒指導の先生に熟睡していたのを叱られた後一人だけ遅くにクラス分けのプリントを見ていた
Ａクラスから探していくとそこに俺の名前はなく探すうちに一つの名前に行き着く
黒壁　春斗
俺の名前は珍しいのでこれで確定だろう。
俺はそんなことを考えながら教室へと向かう
教室は一見普通だ。しかしそれは一年生なだけで二学年になると学力主義により教室が各クラスで割り振られるのだがその落差が激しすぎるのが少し懸念に残っているのだが
教室に入るとすると自己紹介をしていた
……うわぁ、すげぇ見られてるよ
それでも気にせずに俺は自分の席を探す
俺は空いている席に座り眠りにつこうとすると
「ちょうどいいです。黒壁くん。君で最後ですので自己紹介をお願いします。」
するとそんな声をかけられる
仕方なく立ち上がる
「黒壁春斗だ。趣味は昼寝。得意教科は英語だ。よろしく頼む。」
とシンプルな言葉で自己紹介をする。まぁこれくらいが無難だろう
すると席に座るとザワザワし始める教室に俺はため息を吐く。
まぁシンプルかつ単純な挨拶をする。
「はい。以上で自己紹介は終わりだな。黒壁は学校の規定によりＦクラスの代表になる。」
「……げっ。」

うわぁまじか。
ということは俺がここの成績最優秀者なのか。
するとクラス中がザワザワと騒ぎ出す
まぁ、こんな奴が成績最優秀者って言われてもかなり困るよな
てか俺の隣の女子からかなり睨まれているし
「……はぁ。めんどくさいことになりそうだ。」
そんなことを思いながら俺はため息を吐いた

現状

……学園が始まってから一年が経つ３月
中間考査が終わり俺は成績を見ると
霧島翔子　４８１９点
黒壁春斗　４８１０点
二位か……
俺はため息を吐く
数学や化学も今回調子が良く１５０点ほど取れたのになぁ
俺は総合科目を見るとやはり文系科目全てにおいて５００～７００点を取れているのでぶっちぎりの一位だが数学は平均点くらいだしなぁ。
高校に入って空いた時間を数学や化学などの苦手な教科に回しているけど後１０点がどうやっても埋まらない。
今回は自信があったのになぁ
俺はため息を吐きかけた途端
「……こら～!!!!吉井!!」
「……」
また騒がしい奴がやってきたもんだ。島田美波。俺の悪友に一人でもある。俺は呆れながらドイツ語を使い島田に話しかける
「島田、明久がこんな学年順位が張り出されるような場所に来るはずないだろ?」
「あら、黒壁じゃない。」
「てかな。明久がどうしたんだよ。どうせ掃除当番でもサボったんだろ?それはもう男子の宿命みたいな感じだからな。」
「……ごめん。意味が分からないんだけど。」
「まぁ、あいつは面倒なことはほっといて遊びに行く奴だ。てか鉄人呼べばいいだろ。」
「それもそうね。じゃあそうさせてもらうわ。」
「おう。じゃーな。」
すると数分後明久らしき騒ぎ声が聞こえたが聞こえないように振

る舞うか
　っていうのも俺は昼寝の他に読書が好きで子供の頃からよく読んでいたのだが、最近は原作を読んで和訳するということが多い。そのため、ドイツ語やフランス語、中国語も普通の会話程度なら筆記もできるし、島田からはドイツ語について教えてもらったので結構ドイツ語にも対応はできる。
　というより、どちらかというと外国語を読むことだけならインターネットや辞書を使って調べることができるしな。まぁ、だから島田とは仲がいいといえるのだが
「……」
　すると隣の席の根元が睨んでくる
　ぶっちゃけクラスメイトの仲は最悪なんだよなぁ
　俺はクラスでは成績優秀者として一位二位を争っており、隣のクラスの霧島と毎回トップ争いを繰り広げている。
　しかしまぁここは一応進学校なので俺みたいに成績が高く、不真面目な生徒は嫌われる傾向がある。
　まぁ、英語や国語は自分の好きな本を読んだりしているせいで他の生徒からは睨まれているしな。
　ただし先生にちゃんと報告して俺なりの理論で勉強しているので許可はもらっているし、何より先生より点が取れるのにやる意味はないしな。
　てか自分で翻訳している時点でおかしいけど
「あれ？黒壁くん？」
「……ん？」
　最近転校してきたクラスメイトで友達の工藤が話しかけてくる。というものも中学が同じで引っ越した先が同じだったのは少し驚いたが
「あぁ、工藤か。」
「こんにちは、黒壁くん。何しているの？」
「学年別の総合と教科別の順位を見ているんだよ。」
　そういえば工藤って頭よかったのか？

俺はそんなことを考えながら工藤の文字を探してみると
「げぇ。お前１０位以内入っているのかよ。しかも保体二位かよ。」
俺は保体三位で一応４００点オーバーなのにまさかその上を行く奴がいるとはな
「そういう君こそ文系全科目で全部トップでしょ？それと生物も。」
「まぁ、本読んでれば自然と身に入るだろ。英語だってハリーポッターの原文をそのまま読めば結構違う解釈を取れたりするから面白いし。」
「…もしかして自分で翻訳しているの？」
「一応な。まぁだから一冊読むのに数週間かかるけど。」
今でも分からない単語とか文法とかも調べないといけないしな
基本的な有名作品なんかは全て原文で読むようにしているし
「それに自分が好きなことで勉強できるんだ。学校のつまらない授業聞くよりも自分で調べながら楽しみながら読むことができるからな。」
「へぇ～黒壁くんそれじゃあここでも成績いいの？」
「一応次席。理数系は平均くらいだけど文系特化型だからな。」
「……へぇ～意外だね。」
「まぁ、普段からバカばっかりやっているし授業中は面白くなかったら寝ているからそんな感想を取るのは基本だろ。それに俺観察処分者だしな。」
一応俺は観察処分者ということでクラスでも教員からも有名だった
まぁ、試験召喚獣を使いたいためになったんだが。それを知るのは教員くらいだろう
「否定しないんだ。」
「事実だからな。てか真面目な奴が多すぎるんだよ。もっと気楽に遊ばないとつまんないだろ？」
「それもそうだね。」
と工藤は話が分かるので結構話す機会が多いのだ。
「まぁ、工藤みたいな奴がいれば。俺みたいなバカは助かるからな。」

「へぇ～もしかして口説いているのかな。」
「口説いてる、口説いてる。」
「うわ～適当だ～。」
　といつものののりでふざけられる仲は同じクラスではこいつくらいだからな
「んじゃ買い出し行かないといけないから帰るわ。もうそろそろスーパーで割引するから。」
「うん。じゃーね黒壁くん。」
「あぁ。じゃーな。」
　といい別れると俺はスーパーに向かう
　これは俺の日常である
　俺は家に帰ると宿題を終わらせた後、ふたり分の料理を作る
　俺は庭に小さな畑がありおり、季節の野菜が栽培されている
　まぁ、お遊び程度だけど、毎朝しっかりと手入れをしているので野菜が楽しめる
　俺は今一人暮らしをしているのだが、ちょっと悪友の食事事情を聞いた俺は今こうやって余裕があるので飯を食べさせているのだ
　まぁ、光熱費の半分を払う条件に出したのだが。
　するとコンコンとドアの音がなる
「はい。空いているからさっさと入れ。」
　するとがちゃと音がなり女顔の男子が入ってくる
　一応常識はできているが学校中のバカでここ最近は俺の部屋に住み出しているんじゃねーのと言いたいくらい入り浸っている吉井明久だ。
「ただいま!!」
「お前の家じゃねーよ。ほら飯なら後数分でできるから座ってろ。」
「了解!!じゃあ僕はゲームしているから」
「ゲームより風呂沸かせ。マジでしんどいんだよ。」
「え～。めんどくさいよ。」
「……しばかれるか、晩飯が食えなくなるかどっちがいいか?」
「今すぐ風呂掃除してきます。」

と風呂の方に走って行く明久にため息をはく
「……はぁ。全く。」
と俺は料理を作りながらため息を吐く。こいつは俺が観察処分者仲間ということで結構付き合いが長い
まぁよくも悪くもいい友達なんだが
カレーとサラダを作り終え盛り付けた後、テーブルに配膳すると明久も配置につく
とりあえず挨拶をすると食べ始める
「やっぱり美味しいよね。春斗の料理。」
「うっせ。俺よりも料理上手いくせに。」
俺たちは食事当番を決めているというよりも家事当番を決めている
というよりも最近じゃ本当にルームシェアしているんじゃないのかというくらいの割合で止まっている
てかこいつ雄二と康太、秀吉と遊ぶ時以外はこいつ家に住みついているしな。
だから強制的に家事をやらせたし、今明久の家って確か水とガスは完全に止められていたよな。
まぁ、毎食弁当を俺の家で作れるば当然なんだけどさ。
「そういや、お前勉強大丈夫か?・そろそろ振り分け試験だろ。」
「うん。最近じゃ日本史と世界史はＡクラス並には取れるようになったから多分Ｆクラスにはならないと思うけど。」
と時々勉強を見ている時があるのだが、まぁ明久はひどい
どれくらいひどいのかっていうと俺が最初に三角形の面積の求め方から教えるというくらいにひどく、高校の問題を教えるのに数ヶ月かかったくらいだった
「まぁ、それならいいけどさ。てかいつまで居座るつもりなんだよ。お前。」
「う～ん。姉さんが帰ってくるまでかなぁ?・水道代やガス代も半分で済むし。」
「……はぁ。別にいいけど。てか一応問題がなければＢクラス並に点

数は取れるんだから頑張れよ。」
元々勉強の仕方が間違えていただけで、元々暗記は結構得意な明久のことだ。
文系に限ったら全て２００点は超えるし、理数系も１００点台までなら取れるように勉強を教えていた。
教えたというより英語はゲームを全て英語表示に変えてプレーしただけなのだが
現代文も同じように漫画で有名な小説を読ませているだけだ
俺は妹がいて、かなりの勉強ぎらいなので勉強が嫌いな人を成績を上げることには慣れているのだ
「飯食い終わったら一時間だけ勉強して後は遊ぼうぜ。」
「そうだね。今日は何する？」
「大乱かマリ〇ーでいいだろ。勉強からは逃げるなよ。」
「さすがに一時間くらいなら逃げないさ。」
と笑っている明久にため息を吐く
まぁ、こんなことばっかり続いているので平和すぎる日が続いているのだった

進級

「おーい。明久。先行くぞ。」
「うん。じゃあまた後で。」
と玄関から出ると俺はほのぼのと出かける
春真っ盛りに入り俺は通常通り学校へ向かう途中なので焦る必要もない
人混みの中歩き丘を登ると学校が見えてくる
ここにきてもう一年か
新天地は予想外に変な奴が多かったけど充実した日が多かった。まぁ個性的な仲間がたくさんいるからだろう
「おっ。春斗じゃねーか。」
すると後ろから野太い声が聞こえる。後ろを見ると雄二がそこに立っていた
「なんだよ雄二久しぶりだな。」
「おう。そういえば振り分け試験の結果はどうだ?」
「いつも通り上々だよ。まぁ、いつも通り次席ってところじゃねーのか?」
すると苦笑する雄二に俺は首を傾げる
「どうしたんだよ。」
「いや。俺らとバカやっている奴が学年次席だと考えるとな。」
「バカやっているからって勉強できないなんて誰が決めたんだよ。バカやりながら勉強できたら学園が満喫できて最高に楽しいじゃねーか。」
「……お前の考えていることはわかるけどな。」
すると雄二はどこか寂しげにしている。テストの点数が高いことに何か関係あるのだろうか
その後は適当に雑談を続けながら学園へと向かっていると校門前にごつい先生が一人突っ立っていた
「うげ。鉄人。」
「誰が鉄人じゃ坂本!!」

と開始そうそうげんこつを落とすけど
「いや鉄人って言われても仕方ないでしょ。先生みたいな体育教師よりもむさ苦しい教師はですし。体育教師の大島先生よりもスポーツ得意じゃないですか。トライアスロンとレスリングが趣味の先生はどうみたって鉄人としか、見えませんよ。」
それに補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられているし仕方ないとしか言いようがない。
「……はぁ。まぁいい。ほら受け取れ。」
と一つの封筒が渡され俺と雄二はそれを受け取る
試験校も面倒だよなぁ。注目される分変化を取り入れないといけないし。
そして中から紙を取り出しプリントを見ると
黒壁　春斗
Ａクラス副代表
「まぁ、そうだよなぁ。やっぱ霧島に勝つのきついな。」
俺はため息を吐く
「ふむ。やはり理系が少し点数が足りなかった感じだ。」
「ですよね。……文系一位だけどやっぱりか。」
文系は霧島と１００点くらい差をつけているが理系は俺は１００点台に対して霧島は５００点を余裕で超えるからなぁ。ほぼ３００点から４００点離れているし。
「確かに理数系も上がっているとはいえ元々６位だった、貴様がまさか主席争いをするとは思いもしなかったぞ。」
「そりゃ、どーも。生憎負けず嫌いなもんで。」
実際好きなことでは誰にも負けたくないし、一度たりとして文系科目の一位は譲ったことはない。
「しかし文系だけ伸ばしても全教科まんべんなく点数が取れる霧島には運がいい時しか一位は取れないぞ。」
「知ってますよ。てか俺が数学の点数一年で平均５０点上がっているんですよ。一時間以上は集中力もたないからそれ以上は持たないんですけどね。」

嫌いな教科もこつさえ掴んでしまえば後は簡単だしな
「それじゃあ行くか。雄二も行こうぜ。」
「あぁ、これからは敵同士だな。」
と歩き出すとそういえば伝えないといけないことがあった
「おう。それと明久、途中退室しているから試験受けさせろよ。姫路庇ってあいつ途中退席したらしいから。」
「まじ？」
「まじ。ついでに姫路もそっちだからな。案外今年Ｆクラス強いんだよな。俺の中では要警戒リストのトップだし。」
戦略しだいだけどＦクラスはジョーカーが多すぎる
「……悪いが当たるときは警戒させてもらうぞ。どうせ点数調整して代表になっているんだろ？」
「そこまでお見通しってわけかよ。」
「まぁな。まぁ、正直Ｆクラスがうちらに勝ってくれると嬉しいんだけどな。」
「じゃあ手加減してくれるとうれしいんだが。」
「バカか。こんな楽しいこと手が抜けるはずねぇだろ。それに……負けるって言葉だけは本当に嫌いなんだよ。」
「お前らしいな。」
「うっせ。とりあえずさっさと教室行こうぜ。」
と言いながら教室へと向かうと
一旦俺は教室に着いた途端固まってしまう
「……まじか。」
そこには広すぎるドアが置かれてありドア越しからもよく見えている
「凄い教室だな。」
雄二がそんなことを言い出す。実際かなり凄い
リクライニングシートに最新のノートパソコン。てか遠目にみたら個室になっていてさらにエアコンも一人一台付いているんだが
「はぁ、どんだけこのクラスにお金かけているんだか。」
「よかったじゃねーか。」

「俺のとってはあまり変わらないけどな。」
　どこで勉強してても読書できるんだったら別にいいしな。
「んじゃ、今度は戦場でな。どうせくるんだろ。」
「あぁ。楽しみに待ってろ。」
「それと明久に帰りに洗剤買ってきてってっていっとけ。今日割引だし。」
「……あいつまだお前の家に住み込んでるのかよ。了解。」
　そういやあいつあのまま二度寝してたよな。遅れなければいいんだが
　教室に入ると自分の室を探すと
「黒壁くんこっちだよ。」
　すると大きな声で話しかけられる。そこには工藤と木下、そして霧島と久保がすでに集まっていた
「よう、工藤久しぶり。俺の席どこ？」
「ボクの隣だよ。ほらここ。」
　するとすでに俺の机らしきところには去年から交流のある久保と木下、そして工藤と霧島が座っていてそして大量のお菓子とフリードリンクサーバーから入れてきたとされる飲み物が五人分入れられていた
「おいこら工藤。なんで用意もしてないお菓子が大量に積まれてあるんだよ。」
「えっ？ここボクの席だし。」
「……は？いやだって隣の席って。」
　するとリクライニングシートの数を思い出す。
「四人席ってことか。」
「一応木下さんと久保くんが同じ席だね。」
「あぁ、だからこうやって俺の席に座ってお茶会をしているのか。」
　と俺は工藤にため息を吐く
「……すぐどく。」
　霧島がそんなことを言い出すと俺は手を振る
「いや。いい。俺も今後の方針とか聞いてみたかったからな。俺も一応副代表だし。それにちょっとFクラスが俺たちに近いうちに宣戦

布告してくるからその時の話し合いをしておきたい。」
「「なっ？」」
　すると久保と工藤と木下は驚いていたが霧島は驚いてはいない
「……うん。雄二と話していたのは知っている。」
「雄二？知り合いなのか？」
「うん。幼馴染。」
　霧島と幼馴染なの黙っていたのかあいつ。
「まぁ、それにＦクラスに姫路がいったからな。明久も世界史と日本史に限ったらＡクラス並みにしたけど姫路の途中退席に付き合っていたらしく、同じく途中退席でＦクラス。康太に限ったら保体で学年一位だ。……戦争を仕掛けるにはうってつけだろ。」
　俺は近くにあったグミを食べる
「Ｆクラスに姫路さんがいった理由は何故か分かるかい？」
「明久から体調不良で熱がでて試験中に途中退席だってさ。まぁ、詳しいことは知らんが。」
「そうか。それと、吉井くんとは」
　……そういや久保は同性愛者で明久のことを気にかけてたな。ここは話を切り替えるのがいいだろう
「工藤、お前今回の保体何点だった？」
「えっと、４５６点だったよ。」
「……なんか余計に自信なくすな。」
　俺はため息を吐く
　俺も過去最高の４２９点取れたのに工藤との差はやはり大きかった
「あっ。そうだ。霧島。これテスト結果。試召戦争の時に使うだろ。先に成績渡しとく。」
「……いいの？」
「別にいいだろ点数管理しやすいし。というより俺は多分成績上前線に立つことが多くなるだろうからな。てか前線で暴れまくりたいから、前線に配置してくれれば助かる。」
「あら、あなたは観察処分者だから前線に配置してほしくないと思っ

てたのだけど。」
　と木下がそんなことをいうが実際は違う
「俺は試験召喚獣システムを使いたくてここに来たからな。実際はバカはやっているけど、俺は補習一回も受けたことがないし、そもそも俺の召喚獣は教師の召喚獣と同じシステムを使っているからな。よほどのことがない限り痛みは感じないんだよ。」
「……そうなの？」
　木下が驚いたようにしてるが
「あぁ、一度実験でやってみたけど８００点クラスじゃないと痛みはないな。明久のは罰だから痛みのある召喚獣だけど、俺のはしっかりした対痛性はしっかりしてる。実際内申点稼ぐために俺は雑用係引き受けているわけだし。噂が変な方向に広がってなんか観察処分者って肩書きつけられてるけどな。実際は雑務召喚者なんだが説明するのがだるかったから観察処分者で通しているだけだ。別に悪評が広まろうが俺は俺がやりたいことをするだけだしな。」
　実際嫌なことはやらないし雑務を明久に変わってもらうときもあるしな
「それに噂なんてもんで踊らさせていたら人間の本質を見過ごすことになるからな。百聞は一見に如かずっていうだろ。人間の印象を決めるのは俺が本当に見たことだけだ。他人の評価なんかどうでもいいし。」
「アハハ。やっぱり黒壁くんって面白いね。」
　と工藤が大笑いしている。
「というわけで俺は前線に配置してくれてもいいぞ。文系じゃ敵はいないし。」
「実際僕より文系は５０点以上は離れているからね。そういや、武器はなんだい？」
「槍だな。一応６教科は腕輪持ち。」
「……その代わり理数系はＢクラスレベル。」
「……まぁ、特化型だし。これでも一応点数上がっているんだぞ。」
　元々Ｅクラスレベルだったし少しは頑張っているんだが

「それに俺は召喚獣の扱いには慣れているからな。このクラスだったら一番強いと思うぞ。」
「まぁ、確かに召喚獣の扱いは難しいわね。」
「……それなら前線は黒壁に任せる。」
ラッキー。それならお言葉に甘えよう。するともうそろそろ始業の時間なのだしな
「んじゃ改めて一年よろしくな。」
「あぁ、よろしく。」
「よろしくね。」
「……よろしく。」
「まぁ、よろしく。」
俺が挨拶すると全員が挨拶する
これから一年はこのメンバーで活動することになるから少し楽しみだ

ＨＲ終了後

「黒壁くん起きて。」
　と工藤の声が聞こえてくると俺は瞼をあけ目を開けるとそこには工藤と呆れたようにしている木下と久保の姿があった
　少したってから俺は先生の話を聞いて寝てたのか
「……ふぁ～悪い寝てたのか。」
「いや、自己紹介の時も寝てたから本当にびっくりしたよ。なんど起こしても起きないし。」
　工藤も呆れた顔のようにしているが
「俺今日食事当番だったから弁当作ってたから朝早かったんだよ。」
「食事当番？黒壁くんって一人暮らしでしょ？」
「いや、明久と共同生活してる。あいつも一人暮らしだけど食事が塩と水と砂糖だけというカブト虫みたいな生活してたから労働と引き換えに食事代は出してやることにしたら、学校や商店街も俺の家は近いからいつのまにか住み込みやがった。」
「……それって、同棲してるっていうこと？」
　木下がそんなことをいう
「意味的にはあっているけど同棲って……まぁ、同じ寮のルームメイトって感じ。あいつも一人暮らしだけどあいつの家電気以外は本当に今は契約してないし。」
「それ、本当に家だと言えるの？」
　それは俺も思うけど黙っていることだから放っておこう
「まぁ、仕送りには余裕あるしな。明久みたいに趣味に全額支払うバカじゃないし、他人をひとり養えるくらいの余裕はあるから。それに家庭教師のバイトもしてるし金は有り余っているんだよ。」
「……まともだね。」
「まともじゃなければ一人暮らしなんかできないって。ところでＦクラスはＥとＤどちらに宣戦布告した？」
　すると二人が驚いたようにしている
「ちょっと何でそんなことは分かるのよ。」

「当たり前だろ。一応あいつらとほとんど一年間一緒にいたからな。……まぁ雄二のことだからDかな。あいつが確実に勝てる方を相手にするってことはありえないし。それが終わったらBかな。それでAクラスにあがってくるのが普通だろうな。」
「……いや、そんなことは。」
「ありえるさ。多分あいつらの目標は俺らだ。」
俺がきっぱり言い切ると俺はため息を吐き
「実際にあいつらには俺たちを倒せるジョーカーがあるしそれに……俺らだってこのまま見ているままじゃやられるからな。」
俺は少しだけ考え
「俺だったら試召戦争しかけるな。」
「えっ？」
「相手はCクラス。時間はFクラスがBクラスに宣戦布告したら。その代わり和平として終わらせる。」
「和平？」
「あぁ。Fクラスの試召戦争後Bクラスを攻め込ませることを条件にだ。そうすれば相手からの横取りの線もなくなる。それにさっさとBクラスとの同盟を崩壊させる。そしてその後Fクラス戦の交渉を有利にするためのアドバンテージを取るためにな。」
俺はそう一言呟くと工藤と木下が驚く
「えっ？なんで同盟しているって。」
「Bクラス代表の根本とCクラス代表の小山は付き合っているんだよ。今日の始業式で一番前が根元と小山だっただろ？」
「……誰がそんなこと覚えて。」
木下が覚えてないと言いそうだったけど
「……そうだった。」
「「うわっ。」」
と俺含めて三人が驚く
するとそこにはいつのまにか霧島が立っていて誰も霧島には気づいていなかったらしい
「よく覚えてたな。お前。」

「私は一度経験したことは忘れないから。」
なるほど。霧島の凄さが少しだけ分かった気がした。
「……まぁつまり多分手を結んでいるだろうから今のうちに壊してしまえばいいってことだ。元々小山は優等生ずらしながら結構えげつない手を使うからな。それならもっとえげつない手で潰してやろうと思っただけだ。」
「……性格悪い。」
すると霧島がそんなことを言い出すがそうだとは思わない
「そうか？それがこの学園の方針だから普通じゃないのか？」
「……どういうこと？」
「試召戦争って多分学力以外のところを見ているんだよ。試召戦争のルールには原則クラス対抗戦と書かれているだけであって他のクラスが協力することは認めているんだよ。だから裏をかけばB、Cのように同盟を結んだりもできるからな。それにこれ学年のことは一切触れてはいないから俺たちが3年生にだって挑めるし、逆に三年生が俺たちに試召戦争に挑まれることもある。」
「えっ？」
「ルールをよく見ろよ。同学年でしか宣戦布告できないとは一言も書かれてはいないぞ。まぁ経験差とか含めたら誰も俺たちは攻める気もないけどな。」
するとルールを見返す木下たちに俺はため息を吐く
「ルールはちゃんと見とけよ。結構このルールは抜け穴があるからな。そこに取り付いた試召戦争が決着をつけた戦争もいくつかあったらしいし、このルールの中でどんな戦争が起きるのかを予測する必要がある必要がある。臨機応変に状況に対応することも戦略を考えるのも授業の一環ってことだ。だから試召戦争が容認されてるんだろ。授業では学べないものを学ぶ。そうでなければこのシステムは了承されない。ただ勉強意識の促進ならば他にも取り組めることができるしな。」
そういやホームルーム終わったら今日は昼休みだったな
俺は弁当を取り出し飯を食べようとするととんとんと肩を叩かれ

る
　すると霧島が真剣な顔をして
「……さっきのＣクラス攻めについて詳しく聞かせて。」
　するとニヤリと笑ってしまう。
「了解。まぁ、飯食いながらでいいか？」
「……分かった。」
　と霧島は弁当を広げる。
　俺たちは席に座ると弁当を広げる。
「そんじゃ、理由はさっきも言った通り横取りを防ぐためにも。同盟を崩すのにもＦクラス戦を優勢に進めることに必要なんだよ。……正直にいうけどＦクラスは１００％俺たちには今のままでは勝てない。けどある条件を満たした場合それが可能になる。」
　俺は弁当をつなみながら近くのノートパソコンでＷｏｒｄを話しながらメモを取る。
　まぁ行儀は悪いけど仕方はないだろう
「一つ。まずは教科の指定。これは単純に保体になったら負けるってだけの簡単なことだ。土屋康太。いやこの場合はムッツリーニか。康太の保体は一度もトップから降りたことのない。」
「…愛子と黒壁でも厳しい？」
「厳しいっていうより単純に特化型なんだよ。俺は文系、工藤は全教科Ａクラス上位レベルだけど、あいつの場合勉強のほぼ全部を保険体育につぎ込んでる。俺はスポーツや健康が出れば強いけど単純にあいつは保体自体が強いからな。俺なんか叶うどころか相手にすらならない。保体に関してはこの二学年では康太は無敵だ。唯一対抗できるのが工藤なんだが、康太に確実に勝てるとすれば６００点はいる。それに一度も保体では一位を明け渡したことがないという実績を持っている。……多分これから霧島が討ち取られる可能性が一番高い相手になるだろうな。」
　俺はため息を吐く。あいつのその努力を少しでも他に回せばＦクラスではないと思う。
「そして二つ目は一騎討ちに持って来られた場合。康太には確実に負

けるとしてそして明久と姫路に関しては確実に勝てるのは俺の文系くらいだ。特に明久は観察処分者で二学年では一番日本史と世界史は３００点以上だ。あいつも理系は弱いけど一緒に住み始めてからは点数が上がって何とか１００点は取れるようになっている。正直、俺が苦手教科と当たったり世界史だったら正直勝てるか分からないな。結構俺も召喚獣の扱い。姫路は一時は次席だっただろ？俺は最初の頃は１０位～８位辺りだったし、結果的に伸び始めたのは二学期始まったあたりだろ。だから久保も文系以外は勝てる見込みはないだろ。俺の場合腕輪がちょっとぶっ壊れ性能だから勝てるとは思うけど。でも腕輪は理系科目何教科は持っているはずだ。」

確か数学はかなり良かったはずだ。俺とは違い理系有利のオールラウンダーってところか。

「そしてラスト。あまり考えたくはないが、Ｂクラス、Ｃクラス、ＤクラスにＡクラスを攻めさせ、漁夫の利を狙うやり方。」

「……えっ？」

「まぁ、これは俺ならこうするってことだ。まぁ。雄二は俺みたいに非道な作戦をしないとは思うけど。まぁ俺ならこうするな。試召戦争は長期化するとテストを受ける機会が増えストレスも溜まっていく。そして疲労が蓄積したところで潰すのが一番勝率が高い。」

「……」

「まぁ、今回多分ないとは思うがＢクラスを生かした戦術を取ってくるのは確かだ。だからさらに面倒くさいことになる前にも、俺たちはＣクラスを味方側へ引っこ抜くか、Ｂクラスを潰してしまったほうがいい。」

「本当にあなたの作戦酷いわね。」

すると木下がそんなことを言い出すけど

「あのな。それほどＦクラス俺たちとＦクラスの戦力差は離れているんだ。だから勝つとするならば俺なら躊躇なく相手の嫌がることをする。」

今すぐとなると俺たちはそれほどにも有利に運ぶことができる。姫路や康太や明久がいても埋まらない差がある

「まぁ、でも今朝ので確信した。多分一騎討ちを仕掛けてくる。」
「……どういうこと？」
「霧島と雄二と幼馴染だからだ。多分高校ではあまり話している姿は見たことないけど、でも知り合いで意識的に離している可能性が高い。雄二と付き合い長いから大体思考は分かるし多分それは確実だ。」
　それにあいつの目的を少し分かったし少しだけ協力してやろう
「まぁ、だから霧島の弱点を知っているだろうし、勝率が高い。それにトラブルで康太に霧島をぶつけられると面倒臭いことになるだろ。それに明久も試験召喚システムで観察処分者だから操作技術では勝てない。つまり完全に負ける確率が一番高いのが一騎打ちだ。それプラスBとDに手を組まれたら手の打ちようがない。だから強引でもCクラスを引き抜く。Bクラスへ攻め込めさせたら一番いい。まぁ、これは俺の考えだからあいつがFクラスが動かないのであれば、その時は考えようだな。」
「……そう。」
　と一通り説明し終えると少しだけ悩んだようにしている
　てか気づかなかったけど地味に木下と工藤は俺の話を聞いていたんだよなぁ。
「工藤と木下は俺の予想はどう思う？」
「う～ん。私はそんなに脅威だとは思わないけど……黒壁くんの予想は外れたところ見たことがないから。」
「ボクは中学校からの付き合いだけど、その土屋くんはボクでも勝てないの？」
「厳しいな。あいつは保体では無敵っていうほど強い。まぁ、色仕掛けが弱点くらいか。エロに関する抵抗にはとことんないからな。昔のお前みたいに。」
「……なんのことかな？」
　すると話したら怒るよと言いたげにジト目を向けられるがしれっと受け流し少し考える
　というのも元々中学時代はこんなに明るいキャラじゃなかったの

で転校してきた直後は俺でも気づかなかったほどだったし
「まぁ、なるべく得意分野で戦わせないのがベストだな。」
「それならＤクラス戦後にこっちからＦクラスに攻め込むっていうのは？」
　木下がそういうけど
「却下だ。召喚獣の扱いは難しいし、俺らは一対一の簡単な試合しかやったことがない。試験召喚戦争を一度仕掛けているあいつら相手に俺たちが不利になるだけだ。それにテストが俺たちが受けたのは振り分け試験なのも少しきつい。」
「……どういうこと？」
「多分先生の差が出る。特に姫路は田中先生や数学の船越先生のテストを受けたら余裕で４００こえるだろ？」
「なるほど、先生の特徴を使って差を埋める方法もあるのね。」
「正解だ。俺たちが今回受けた先生は基本点数の採点が厳しい先生ばかりだ。それが振り分け試験が難しいとされている一つの理由だ。」
　実際今回も採点が厳しい先生が多かったしな
　振り分け試験はキチンとしたクラスの判別をつけるために問題は厳しく採点する必要がある
　それだから成績差がはっきりするのだ
「……黒壁。もし、ＦクラスがＢクラスに宣戦布告した時使者になってくれる？」
　すると霧島がそんなことを言い出す。俺は頷き
「了解。Ｃクラスでいいか？」
「うん。今日の自習の時に説明する。戦後交渉も自由にしていい。」
「ちょ、代表？」
「……いや、さすがにそれは度がすぎるんじゃーねーのか？さすがに霧島がやったほうがいいだろ。」
　俺と木下はさすがに反対する。ここまでいくとさすがに独裁になるしな。
「…私はＣクラスに興味ないから。」
　あっ。そういうことか

「ならちょっと戦争方式も変えていいか？小山の性格からいえば確実にBクラスを攻めさせることができるんだが。」
「……うん。黒壁に任せる。その代わり、Fクラスの戦後交渉に一つだけ命令できる権利が欲しい。」
「……」
なるほど、霧島の目的はそういうことか
「了解した。その程度だったら多分なんとかなる。」
「……そう。」
すると珍しく笑顔を見せる霧島に少し笑ってしまう
なるほどそういうことか。
俺は食べ終わった弁当をしまうと俺はインターネットを開き戦争のシュミレーターのプログラムを始める
さて楽しい戦争の時間の始まりだ

脅し

俺は放課後になると久保に頼みＤクラスの女子と接触するように頼む。

久保の顔の広さは尋常でほとんどの女子生徒が好意的に思っているらしく俺と一緒にいるときも時々ラブレターをもらっている

まぁ、こいつの場合好意的に思っている奴が男子な時点でフラれるって分かっているんだが、そこは黙っているのが優しさってものだろう

……俺は同性愛は漫画や物語の中でだけでいいと思っているけど

いや、去年俺の席のとなりだった奴なんか同性愛の度がすぎて畜生道に落ちてもいいと思っているほどやばい奴だったし

てか俺の一年の席最悪だったもんな。

卑劣とマジキチに囲まれているって

するとしばらくすると久保が戻ってくる

「どうだった？」

俺が一言言うと苦笑いをして

「うん。やっぱりペナルティーはなかったよ。条件はＢクラスの室外機を壊して欲しいってことだけ。」

やっぱりＢクラスか。それなら先に手を打っておくか

「了解。それじゃあ交渉に行ってくるわ。久保も一緒についてきてくれ。」

「しかし本当にこんな作戦よく考えるね。」

「まぁ、完全にこの試召戦争は正直あまり意味がないからな。……さて動くか。」

といい俺は隣のクラスへと向かう

一応自習の時にＣクラスには使者を送っていたので多分残っていることだろう。

「失礼するぞ。」

すると俺が入るとそこには三人の女子が座っていた

小山と水口、そして小柴か

俺は少し確認した後に少しだけ小山の方をみるとやはり警戒しているのがよく分かる
「Ａクラス副代表の黒壁だ。Ｃクラスと条約を結びにやってきた。」
「……あら、宣戦布告だと思っていたんだけど。」
　すると小山がそんなことを言い出す。まぁ、隣のクラスだし聞かれてもおかしくはない
「いや、最悪そうするってことだ。まぁＣクラスにとっても悪くはない案をだすつもりだぞ。」
「……話を聞かせてくれるかしら。」
　そうこないとな
「……根本を裏切って俺らと同盟を結ばないか？報酬は試召戦争で弱ったＢクラスの教室ってところでどうだ？」
　するとＣクラスの代表格は目を見開く。
「どういうこと？」
「近いうちにＦクラスとＢクラスで試召戦争がおこる。その間俺たちと模擬の試召戦争をやってほしい。……とはいっても補習はなしで戦死のない試召戦争と言う名の召喚獣操作訓練だな。」
「ちょっとどういうことですか？それじゃあお互いにメリットが。」
「まぁ、聞けって。……小山、お前は何回召喚獣を操作したことがあるか？」
「えっ？五回くらいだけど。」
「そうだな。他の奴らもそうか？」
　すると周りにいる女子も頷く。
「まぁ、そうだよな。俺を外したＡクラスだってそれくらいだしな。…でもなＤクラスとＦクラスは違うけどな。」
　するとＣクラスが首をかしげる。俺は久保に目線を向ける
「実はＤクラスとＦクラスは講和条件を出すことによってＤクラスは戦争の敗戦のペナルティーがない状態なんだ。振り分け試験はクラス分けがはっきり分かるために先生が難しく作成したもので、ふつうのテストよりも点数が下がる生徒が多いんだよ。」
「つまり今Ｂクラスと同盟を結んでいることがバレたら成績も有利な

位置にいて、召喚獣の扱いが少しうまいＤクラスと戦争になる可能性があるってことだ。俺だったら速攻でＣクラスに攻めるけどな。」
　するとＣクラスの数人の笑顔が固まる。
「脅しているの？」
「脅しているんだよ。」
　俺はきっぱり答える。すると隠す気のない俺に少しだけたじろぐ
「ついでに俺たちは自習の二時間を使って補充試験を受けたからお前らよりも試召戦争を始める準備はできているんだよ。ついでにお前らが受けなかったらＤクラスと共闘してＣクラスに攻め込んだ後にあえて施設の交換をせずにしとけば、Ｄクラスだけではなく　Ｅクラスにも攻め込む口実を与えることになる。」
「つまり、Ａクラスに協力しなければ私たちは下位クラスの標的にさせると。」
「そういうこと。生憎俺らの最終目標はＦクラスだし他のクラスとはなるべく穏便に済ませたいだけだ。それに多分戦争はＦクラスの勝利に終わる。始業式を見る限りＢクラスには腕輪持ちは誰もいなかったはずだ。しかし俺はＦクラスにもう二人腕輪持ちを持っている奴をしっている。それに点数には負けていても作戦をしっかりとしたＦクラスの方が優勢だ。それにあいつらは多分設備の交換はＤクラスの設備同様に、交換はしないだろう。最終目標は俺らって言っていたからな。だから弱ったＢクラスをそのまま食えるってわけだ。」
「……代表。私は信じられません。ＦクラスがＢクラスに勝つなんて。」
　と取り巻きの一人がそう言うけど小山は何かを考えている。
「……まぁ、そっち次第だ。目標が俺らだったのならば別に俺らに挑んでくれても構わない。俺らは戦争の準備はできているからな。」
「味方だけど、黒壁くんはどうしても悪役にしか見えないな。」
　うるさい。ほっとけ
「ねぇ、この作戦は誰の案なの？どう考えてもＡクラスの考えるような案ではないと思うんだけど。」

すると小山がそんなことを言い出す。まぁ、過去からみてもＡクラスが脅しや脅迫なんて俺らくらいだしな
「俺だよ。悪いけど俺らはＢクラスやＣクラスよりＦクラスに脅威を感じている。初日から試召戦争を仕掛ける実行力、そしてきちんと上位クラスに勝利を納め次のクラスに挑むことを前提に行動している。……悪いがどんな妨害をしようがＢクラスには勝ち筋が見えない。誰かを傷つけようとするなら日本史３００点オーバーのバカが特攻するだろうしな。」
「……へぇ～。」
「ついでにこの交渉断るのならＢクラスに言ってくれても構わない。別にこっち側は別に困らないし作戦に支障はないしな。ただＣクラスに明日にでも戦争を仕掛ける気があるだけだ。」
「……分かったわ。その代わりお互いに戦争後一年間の不可侵を約束してくれるのならその同盟受けてもいいわ。」
「……あれ？もうちょっと条件を渋ると思ったんだけど。それに一年間って長いな。」
俺は少しあっけなく終わったので少しだけキョトンとしてしまう。Ｂクラスの倒す算段や色々決めてたのにな。
「私たちの最終目標はＢクラスなの。元々Ａクラスと戦う気はないし、何よりも元々二学期には裏切るつもりだったから。」
……あぁ、そういうことか。さすがにそれは読めないわ
「俺がいうことじゃないけど、性格悪いな。」
「そうじゃないと代表なんかできないわよ。」
「そりゃ、そうか。」
と軽く笑ってしまう。笑い合う俺と小山だが久保と取り巻きの奴はかなり引いているな
「それならＡクラスと同盟は承認ってことでいいか？それと模擬の試召戦争の件も。ついでに協定違反に反すると強制的に敗北。つまり代表の戦死っていうのはどうだ？」
「それでいいわ。それなら条約を結びましょう。Ｂクラスへのと模擬戦争の宣戦布告の時期はＡクラスに任せるわ。」

「あぁ、こちらから改めて連絡する。と言ってもＦクラスがＢクラスに宣戦布告した時に模擬戦争。ＦクラスとＢクラスの戦闘が終了した翌日の朝のＨＲ時にそっちはＢクラスの教室にいるクラスに宣戦布告。俺らはＦクラスにいる方に宣戦布告をする。一応模擬戦争は試験教科はそっちに優先させるし、小山も召喚獣の操作にならしときたいだろうからな。戦死はしないぶん前線に出られる。これから共同戦線をはるんだお互いに点数の把握はしといた方がいいだろ？」
「……なるほど。そういうメリットもあるのね。」
「別に根本と別れろって言っているわけじゃないんだし情報を規制しているわけでもない。ただお互いに利益を得る為に協定を結ぶだけだ。それにそっちにいる唯一の腕輪持ちの水口を前線に押し出せば根本なら打ち取れるだろ？」
　俺は後ろにいるボサボサの前髪で目が隠れた女子を指差すと
「あら、知ってたの？」
「そりゃ、俺と久保はさすがに知っているだろ。毎回現代国語でトップ争いしているだし。」
「そうだね。黒壁くんが点数覚えていたのは驚いたけど。」
「黒壁くんはおかしいです。なんで振り分け試験で７００点オーバーできるんですか。」
「……とはいってもなぁ。好きだから成績は伸びているわけだし。ぶっちゃけ本を見てたらこうなっただけだしなぁ。」
「うぅ。黒壁くんがいなければ私がトップなのに。……どうして。」
「いや、さすがにそこまでは面倒見れない。てか話逸れすぎだな。ぶっちゃけＢとＣはほとんど差がないから特化型で少しずつ前線をあげていけばＢには勝てるだろ。ＣとＢの違いは安定して点数が取れるかだろ。得意教科はＣクラスの方が点数高いやつの方が多いし、特化型がＦクラスについで多い分平均的に点数を出すことができるしな。」
「なんで私たちのテストの点数が漏れているんですか？」
「いや。俺が去年のテストから各教科の注意リストをちゃんと記録しているからなほとんどＡクラスだけど地味にＣクラス多いんだよ。

各教科のトップ１０にも少しだけいるし。」
　この学年のトップ１０位は点数は記載していないが乗っていることが多くほとんど俺の知り合いが占めているので分からない奴でも点数の間は分かるのだ。
　まぁ、主要科目トップ３は点数がでるのだが
　……それに俺にとって見たくもない名前も記載されていたし
「……あいつ来たんなら先に連絡しとけよバカ。」
「どうしたんだい？」
「いや。なんでもない。それじゃあ３枚の契約書を書いて欲しい。一つは鉄人に提出。」
「誰が鉄人だ。」
　するとごとんとげんこつが落とされる
「っぅ。」
「全く。しかし、Ａクラスらしくないな初日から動くなんて。」
「代表が雄二の時点で目標は俺らしかありえないでしょ。俺だって調節して入るかどうか考えましたし。」
「ほう、ではなんでお前はＡクラスにいったんだ？お前があいつらの保護者になってくれると助かったんだが。」
　と鉄人は俺にげんこつを落とした後に驚いたようにしていたが
「いや、須川や横溝のいるＦクラスに本当に行きたいと思いますか？」
「……あぁ。そういえばお前工藤や霧島と話す機会が多いからよく追いかけられていたな。」
「話が早くて助かります。」
　あいつら文房具をよく投げてきたから潰すよりも逃げる方が早いと気づいてから週３で追いかけられてたしな。
「あら。黒壁くんってモテるんだ。」
「いや。モテないぞ。どんだけモテないって俺の妹の成績の酷さくらいモテないぞ。」
「それは相当だな。」
　鉄人がため息を吐く。やっぱりあの時の名前はあいつだったか。
「話が逸れたな、調印を結ぶんだろ。さっさとしろ。俺はＦクラスの

担任になる準備で忙しいんだ。」
「……先生。お疲れ様です。」
俺が鉄人に同情の目線を送るとそんな目で見るなと釘を刺される。
俺は久保が作成した協定書にサインとクラス印を押す。これは代表の代理に署名できる唯一の判子で基本は代表が持っておくべきだが霧島に一任されるというおかしなことが起こっていた
「これで終わりっと。それと、船越先生に連絡いれといてください。あれは須川の照れ隠しで本当は須川が話があるらしいって伝えておいてください。」
「「「うわぁ。」」」
というのは今日の試召戦争時に船越先生（生徒を単位をたてに交際を申し込んでくる先生）に放送された明久のためを思って放送した本人に擦りつけることにする
多分雄二のあんだろうが実行する方も方なので須川に代償を償ってもらおう
「わかった。しかし先生を。」
西村先生には悪いが
「いや、さすがにあの先生はちょっと近づくのはさすがに、俺でも気が引けます。実際被害にあってますし。」
「……お前がどれだけ船越先生を嫌っているのかよく分かるな。」
いや、さすがに被害にあったことがあるのにさすがに近づく気にならなりませんって
「それじゃあ久保帰るぞ。一応条約に乗ってくれてあんがとな。」
「ほとんど脅迫だったんだけどね。」
「脅迫も交渉の一つだ。覚えていた方がいいぞ。」
「そのやり方には肯定できないけど。」
「いや、その場合黒壁くんが正解よ。やり方は汚いけど決してルール違反ではないしね。」
小山がそういうとこいつはやはり代表の器を持っていることがわかる。
「……それに、黒壁くんとは仲良くなれそうだし。」

「あっそう。んじゃまたな。」
といい俺は教室を出ると少しだけため息を吐き
なんで性格に一癖あるやつばかりが俺の周りにいるんだろうとため息を吐いた

妹

学校が終わり買い物に行った後に俺は自宅に着くと家にはすでに電灯がついていて明るくなっている
明久はすでに帰って来ているらしい。まぁ灯がついているから分かるのだけども
俺は鍵を開ける
「お兄ちゃんおかえり～。」
「ゴフっ。」
すると義理の妹の林結衣が抱きついてくる
「春斗。おかえり。」
明久がぐうだらとゲームをしながら
「……」
とりあえず色々ツッコミどころが多すぎるけど
「結衣。お前今週の飯当番な。」
多分今日から住むだろう住民に俺は一言声をかけた
「それで、言いたいことが何個かあるんだけどさ。」
飯を食べながら俺は結衣をみて
「お前一週間どこに住んでいたんだよ。」
俺は結衣をジト目で見つめる。というのも試験表には林結衣という名前が記載されており、相変わらず得意な家庭科だけはトップの７８０点をとってたからな
振り分け試験から一週間は経っているので一週間前からこっちに来ていることになるんだがその間連絡もせずにどこに行っていたのかが気になった
「えっと、電気だけ通っている空き家があったからこっそり侵入してそこで寝泊まりしてた。」
「……おい。それ、完全に不法侵入だろ。」
ジト目で結衣を見るけど
「ううん。マンションの家主さんが道に迷っている私を引き連れてお兄ちゃんの家が見つかるまでここに住みなって言ってくれたの。こ

この家の家主は家賃と電気代は払っているだけで月に一回帰ってくればいい方だから泊まってもいいよって言ってくれたの。」
「……それ絶対僕の家だよね。」
「逆にお前じゃなければ誰なのか知りたいわ。」
いや。本当にそうなんだよ。明久の家には大型家具が少しあるくらいで今じゃほとんどが俺の家に直帰し明久の部屋は作られているほど俺の家は明久の住処になっている。
「それとお前誰かに聞くって発想はなかったのか？」
「お父さんが住所を渡してくれたんだけど漢字読めなくて。」
「お前文月町一丁目でどこが読めないってお前まさかぶんげつって読んだな？」
「なんで分かったの？」
「いや。なんとなく。お前のバカさならありえると思っただけ。」
「いや～それほどでも。」
「「褒めてないから。」」
と呆れながら俺は妹の作った鯖の味噌煮を食べるけど
……勉強できないくせになんでこんなに料理はうまいんだ。こいつ。
俺は首をかしげると
「でも、春斗に妹っていたんだね。」
「まぁ。義理だけどな。まぁ見た通りバカすぎる奴だし時々ボーとした奴だけど仲良くしてやってくれ。」
「うん。これから私もここに住むからよろしくね。明久くん。」
とニコっと笑う結衣に顔を赤くする明久。まぁ、気持ちは分かる
こいつはバカであること以外は本当に女子としたらほぼ完璧に近い
料理もでき見かけも普通にいい。
まぁ、よくスカウトに引っかかるほどだった
ただ本当にバカすぎるだけなのだ。
どこまでバカなのかというと、……数学以外は全部赤点という意味不明な記録を出したことがある

文月学園は進学校でありながら基本問題がなければ大体の生徒は受け入れる学校だ
てか数学は普通にできるのになんで他の教科ができないんだよ
「とりあえずDクラス勝利おめでとうな。まぁ、施設の交換も何もしなかったらしいけど。」
「あれ？もう知っているんだ。」
「お兄ちゃんは大会とか争うもの本気で勝ちにくるから。よくゲームの大会で全国大会に行くほどの実力者だし。」
「えっ？そうなの？」
「私に勝てるのってお兄くらいじゃない？」
「あのな、何年前の話をしているんだよ。俺がゲーマーだったのは中二の時ぐらいだろ。」
「いや。勉強もできて野球もエースで４番、完璧な優等生に見せかけて家じゃ最低限度しか勉強せずにゲームとアニメばっかりだったじゃん。」
「えっ？」
「明久くんは知らないんだ。私たちの中で一番猫かぶっているのはどう考えてもお兄ちゃんだよ。鬼畜でドＳで愛ちゃんからかってばっかりで。」
「……お前、俺のことをそう思ってたんだな。」
俺が呆れてしまうけど
「事実でしょ？」
「事実だよね？」
「まぁ、事実だな。」
誰もが認めるドＳだしな。
「てか工藤こっちいるぞ。Ａクラスに。」
「あっ。そういえば愛ちゃんも引っ越すって言ってたけど文月だったんだ。」
「はぁ、調べとけよそんなの。てかお前まだ地図記号を読めないのかよ。お前はもっと勉強しろ。」
「うぅ。あっ。でも最近小学校６年生レベルの漢字テストを５０点取

れるようになったよ。」
「……お前はまだそれくらいのレベルなのか。」
　呆れる俺に軽くため息を吐く。
「いや、じゃあ１６００年に起こった関ヶ原の戦いで最初は西軍についていたが途中で裏切り東軍がついてたことがきっかけで東軍に優勢になった。裏切った人物と各軍の総大将を答えろ」
「……総大将ってなに？」
　……こいつ本当に文月に入らせても良かったのか？
「……お前だから近所の中学生におバカのお姉ちゃんって言われるんだろうが。」
「ちょっと。お兄リアリティの高い嘘つかないでよ。」
「悪い。近所の小学生だったか？」
「「……人違いです。」」
「……お前ら本当に言われたことがあるのか？」
　結衣はまだしも明久も言われたことがあるとは
「まぁいい。次はＢクラス戦なんだろ？せっかくだから勉強に付き合おうか？」
「あれ？試召戦争のことってお兄に話したっけ？」
「いや。調べれば出てくるだろ。久保に確認してもらったんだよ。俺たちも試召戦争を仕掛けるつもりだし。」
「「えっ？」」
「俺たちはＣクラスに攻める予定なんだよ。Ｆクラスが仕掛けると同時に俺らも出る予定。」
「それ本当？」
「本当、本当。」
　まぁ模擬戦だけどもな
「俺が霧島と話し合って決めたことだ。Ｆクラスにとっても朗報じゃないのか？」
「……なんで？」
「いや、根本と小山って付き合ってるし、代表同士が付き合っているなんて同盟もいいところだろ？」

「「っ!!」
すると一瞬で顔を曇らせる二人に俺はため息を吐く
「あれ？知らなかったのか？」
「「うん。」」
「……珍しいな。あいつが情報収集を怠るなんて。」
俺はため息を吐き
「雄二に伝えておいてくれ。貸し1ってな。」
「本当に雄二に貸しを作れるのって春斗くらいしかいないよね。」
俺がため息を吐くと俺は晩飯を食べ終わる
「んじゃ先に部屋戻るから。今日くらいは勉強しとけよ。参考書はいつもの場所にあるから。」
「うげっ。」
「明久くん頑張って。」
「何他人事みたいに振舞っているの？多分林さんもだよ。」
「えぇ～それなら数学するから一緒に勉強しよう。それとわたしのことは。」
「……俺邪魔だな。」
俺は寝室にあくびをしながら向かう。さて布石は打ったし、
次の手はどうする？雄二。

戦略と元恋人

「こういう作戦のためにＣクラス戦をやるから。」
「「……」」
　俺は翌日のホームルーム時になぜ戦争をするのか、なぜＣクラス戦を報告し終わる。
　霧島は黙ってきいているのだが口をポカーンと開けている
「……少し質問いいかな？」
「あぁ、いいけど。」
「……これは本気かい？」
　俺が作戦という名の今回の本当の目的を伝える。
「あぁ、今回の下りはＢクラスに負けてもらうために罠なんだよ。ぶっちゃけＣクラスとの同盟は元々はどうでもいい。ただ、借りを作る為にＦクラス戦で相手に有利にさせない為にしただけ。まぁ、この調子なら短期でＦクラスの戦争は終わらせることができるだろうな。その為にはＣクラスに侵入する名目が欲しかっただけなんだよ。」
「……うわぁ、相変わらずだね。」
　工藤は呆れたようにしているのだが
「でも、その条件はどうやって。」
「Ｄクラスを使う。Ｄクラスに三ヶ月の不可侵条約を昨日のうちに久保に結んでもらった。この情報をＣクラスの小山に根本に伝えてもらう。」
「……それがどういう意味が。」
「……ＣかＢクラスに戦争を仕掛けると見せかける為だな。」
　するとクラスメイトの一人が発言する
「あぁ、その通りだ。それでＢクラスとＦクラスは協定を結ばせる。そこで小山を使いＦクラスと時間外不可侵を結ばせるのがいいだろうな。」
「……本当こういうの黒壁くん考えるのは好きだよね。」
「協定違反による反則負けを狙うって。あんたね。」
「策略だって武器の一つだぞ。まぁ裏切る可能性はあることはあるけ

どまぁ俺たちには関係ないからどうでもいい。どちらにしろ漁夫の利を得やすいからな。」
「……本当に性格悪いけど、でも確かに最善の策ね。経験を与えずに勝たせることが可能だから。」
　すると頷く。
「でも、警戒して宣戦布告しないんじゃ。」
「してくるさ。だからBクラスとCクラスは手を結んでいる情報と、俺たちがCクラスを攻める情報を与えたんだ。今回の戦争は電撃戦。速さが大事なんだよ。今回の戦争は奇襲攻撃じゃないとFクラスに勝ち目はない。姫路が透けた以上姫路のマークを考えさせる時間を与えない為だ。Fクラスは成績最低クラス。策略でこの戦争は勝つしかないんだよ。」
　それが有利になるにしろならないにしろそうしないといけない
「……まぁAクラスを攻め込む以上Bクラスの力なく勝つことは不可能だからな。でも本当に久保には助かった。これDクラスと不可侵を結ばないと絶対に成り立たなかったから。」
　Dクラスには俺にとって苦手な人物がいるので本当に助かった
「霧島。」
「……うん。今日の午後からCクラスとの戦争。伝達班は愛子。前線は文系で固める。理系がきたらサポートの優子が入って。」
「えぇ。」
「主力は俺と久保、そして木下。近衛部隊は霧島、佐藤の指示に。……模擬戦だからといって代表の首を取られるなんて以ての外だぞ。」
「おう。」
　大きな声が上がる
「それじゃあ軍略会議は終わるわ。午後から開戦するからできの悪かった教科の午前中は補充試験を受けて。」
　すると俺は腕を伸ばす
「あ～疲れた。」
「疲れたって。そういえば目立つことはあんまり好きじゃなかったよね？」

「あんまりな。」
「目立たないって言っても一年の時から目立っていたでしょ？」
「ほとんど巻き込まれてのことだったし。主に明久関係で。」
「……ごめん。」
　木下は何度も俺が巻き込まれて被害にあっていることを知っているのでため息をついている
「まぁ、試召戦争は俺がこの学校に来た理由だしな。ずっと記載した通りなんだけど、なんかＢクラスはきな臭いんだよなぁ。」
「きな臭い？」
「そうそう。あまり戦いたくないっていうか。試召戦争の規則第８条をうまく使ってきそうなんだよ。」
「……えっと」
「簡潔に言えば戦争の勝敗は教師の認めた勝負であれば何をやっても許される。……まぁ多分予想される一騎討ちのルールが適用されるルールなんだよ。」
　工藤が思い出そうとしているが話が進まないので俺がまとめたように
「……それとどういうわけが。」
「……多分開始したらすぐに分かるさ。それじゃあ形式的な宣戦布告行くから二限目終わったら木下ついてきてくれ。」
「えぇ。……いつもこれくらいやる気だせばいいのに。」
　残念そうにしているが
「生憎、気分屋で興味がないことをやる気になれないしな。」
「あなたは差が激しすぎるのよ。大体英語や日本史の時間なんかほとんど寝ているか、本読んでいるだけじゃない。」
「だって簡単だしな。」
「簡単だからって、授業休んでいい訳じゃないんだけど。」
「でも、中学の時はよくボクは教えてもらったし、ちゃんと理由があれば起きているんだよね。」
「そうなの？」
「うん。多分言われなかったからとか言って教えていないだけで家で

吉井くんと結衣ちゃんの勉強見てあげているんだって。結衣ちゃんが言ってたよ。」
「…あのアホ。」
　早速工藤に連絡したのかよ。
「結衣ちゃん？誰？」
「黒壁くんの元カノで今は妹だよ。」
　工藤の答えに木下と久保は少し引いているのだが
「……おい。その言い方。詳しい説明がないと俺がシスコンで妹と付き合った変態になる。まぁ、母親の再婚で今の親父の娘が彼女だった結衣だっただけだ。」
「……それって相当な確率じゃない？」
「まぁな。ついでに今Ｆクラス。苗字も俺は旧姓使っているから苗字が違うから妹だと思われないけど、バカだけどいいやつだから仲良くしてやってくれ。バカだけど。」
「バカだけどって。あなたの義理とはいえ妹なんでしょ？」
「……バカとかそういう次元じゃないんだよ。あいつの唯一の弱点がバカなことだから。」
「……うん。小学生上学年の問題解けるかも危ないよね。」
「家事やっていた分勉強を一切やってこなかったらしいからな。仕方ないって言っちゃ悪いけど仕方ないけど、将来がマジで不安。誰か彼氏でも見つけて養ってくれたほうがいい。」
　なんか複雑だけどもな
「まぁ、でも人気はでるだろうね～。」
「出るだろうな。ゲーマーなのと勉強ができない以外は完璧だからな。優しいし、気遣いもできて、家事まで完璧。……多分霧島以上に人気でるんじゃないの？」
「助けて。お兄ちゃん。」
　するとガラガラと物音を立てると結衣がやってくる
「……どうした？」
「明久くんが島田さんに関節技をきめ。」
「……どうしてそうなった。」

俺はため息を吐く。
「えっと、実は私の家に明久くんが泊まっていることがバレて。坂本くんがお兄ちゃんを呼んできてって。」
私の家って元々は俺が住んでいたところにお前が上がり込んできただけだけど。まぁ嫉妬であぁなっているんだろうな。
……まぁ、Fクラスの教室はパス。須川たちいる場所には行きたくないし。
ただでさえ木下たちと話して追いかけられるのに。
すると木下と久保は苦笑いをしている
俺が散々な思いをしたからのをこの二人は知っているからな
そんなことを気にせず結衣は続きをいうと
「島田さんを補習室送りにしてって。」
「あいつは鬼か。試召戦争前だぞ。」
「でも、お兄ちゃんでもそうしてたでしょ？これから戦争するって言っているのに。」
「……まぁな。」
味方の士気に関係することだし
「てか、試召戦争ってお前ゲームモードか。」
「だってゲームじゃないの？」
「……自分の学生生活がかかっているのに、気楽だな。」
「私はお兄ちゃんと一緒の学校に通いたかっただけだもん。」
「……アホ。」
「なんで!!」
よくそんな恥ずかしいことを言えるな。こいつ
「はぁ、しゃーない。行くか。工藤。」
「えっ？何でボクも？」
「お前も試験受けないだろ？ほとんどの教科でいい出来だったじゃねーか。受けることないんだったらついでに手伝え。」
「別にいいよ～面白そうだし。」
「というわけでちょこっと行ってくる。霧島、雄二に伝えることはあるか？」

「……。」
首を横にふる霧島
「了解。んじゃちょっと調べることもあるから昼食時まで戻らないから。」
「……？」
「気にしなくていい。ほら行くぞ。」
俺はＦクラスの方に歩いていこうとすると
「うん。いこ。」
すると手を繋いでくる結衣に少し苦笑してしまう。
「はぁ、これだから。」
「……ほへ？」
「何でもない。それじゃあ行くぞ。」
「相変わらず仲いいね。」
そんなもの俺は苦笑してしまう。
「そりゃ。前まで恋人同士ならそうなるだろ。別れたとも言いづらいし。」
「それでも普通の兄妹としたら仲は良すぎると思うよ。」
「これ見て断れると思うか？」
俺は結衣の方を見ると幸せそうに笑っているのをみて
「笑顔って凶器だね。」
「心の底からそう思う。」

飯

「……ってことがあって。」
「全く君は。どれほどトラブルに巻き込まれるんだ。」
昼休憩時に俺と久保、木下と工藤は屋上に上がり飯を食べていた
「俺だって巻き込まれたくて巻き込まれる訳じゃないんだよ。」
と俺たちの手元にはそれぞれだの食事があり
俺と工藤は弁当で、木下と久保は購買のパンを屋上に持ってきている
「しかし、どうするの一騎討ちも場合、こちらが不利なんでしょ？」
「あぁ。１０戦あったら６は負ける。あいつらは多分康太の保体と結衣の家庭科はほぼ確定。工藤には悪いけど振り分け試験のあいつ調子悪くて４００点代だったからな。あいつ普通なら５００点オーバーなんだよ。」
「…えっ？」
「それに結衣に至っては家庭科で７００点オーバー。普通の試召戦争じゃ使えないけど、一騎討ちなら確実に使ってくるだろうな。」
この学園じゃ家庭科は使えないのだが一騎討ちだからこそできる。
「まぁ、後から作戦は伝えるけど。ちょっと木下としてはあまり気が進まない作戦をとるかもしれない。」
「……どういうこと？」
「教科選択権を強制的に使わせようと思う。姫路と明久に教科選択権を与えたくないしな。」
……あんまり好きじゃないやり方だけどな
「……はぁ、あんたね。それやめなさい。」
「……何が？」
「黒壁くん、いつも結構Ｓなのに友達が傷つくことだといつもそんな顔するよね。」
「顔？」
俺は首を傾げる。
「まぁ、いいわ。まぁやれることなら引き受けるわよ。」

「助かる。」
　俺はため息を吐くとすると屋上の扉が開く
「あれ？」
「あら？」
「えっ？」
　するとＦクラスの明久たちと目が合う。
「あれ？お兄ちゃんも屋上でご飯食べているの？」
　すると結衣がキョトンとしていると
「あのな。あんなガリ勉みたいに勉強ばかりしている空間にいると息苦しくて飯も美味しくいただけねぇよ。」
「お主、本当に次席なのかの？」
「……確かめてみるか？」
「いや。日本史７００点オーバーのお主に勝てるわけなかろう!!」
　すると首を物凄い勢いで横に振る。
「あんた、何敵に点数を公開しているのよ。」
「別に。明久は俺の点数ほぼ理解しているしな。明久の勉強は俺が見ているし。別に俺の点数は知られても作戦の誤差はないさ。それにこちらは文系中心で攻めるしどうせ補充試験を受け直すことになる。それに姫路ごとき何とでもなるという雄二に向けてのプレッシャーにもなるしな。それに腕輪の能力を知っているのは霧島だけだ。それさえ知られなかったら俺は問題ないんだよ。てか文系で俺に勝てる奴なんてそうそういないし。俺はこの腕輪があるからな。」
　俺の手には緑色腕輪が装備されている。去年の模擬召喚獣大会に出場して操作においてはぶっちぎりのトップだったからこの腕輪を手にいれることができたのだ
「あれ？秀吉くんが二人？」
「ちげーよ。本物の双子だよ。男女でこんなに似ているのは少し驚くけどこっちの木下はピンク色の髪留めしているだろ？分かりにくいと思うが。」
「しかしお主は一度も間違えたことがなかろう。姉上の髪留めもお主が買ったものだと聞いておるのじゃが。」

余計なことを言うなよ秀吉
正直木下はこの学校へ来てからの初めてできた友達だし、誕生日プレゼントで秀吉の誕生日パーティーをした時に同時に渡したものだ
「…別に。」
「しかし姉上はその髪留めを大切にしているからのう。姉上がこの前専用の小物入れに」
「ちょっと秀吉。」
「……あぁ。うん。気に入ってくれたならよかったけど。」
「こういうところがずるいんだよね。」
すると工藤が剥れる
「何がだよ。」
「まぁ、ずるいわね。」
「お兄ちゃんは確かにずるいです。」
「……何がずるいんだよ。」
俺は首をかしげた時だった
バタンと目の前で康太が倒れる
「えっ？」
とっさのことだが久保も見たらしくお互いが声を失ってしまう
康太を見ると軽く痙攣状態におちいると
「わわ、土屋くん。」
姫路がかけよるとすると康太が立ち上がり手を親指一本をあげる
多分何だかのサインだろうが
……見なかったようにしようか
「そういえば、最近できたクレープ店って結構人気らしいんだけど本当なのか？」
「あ、あぁ。美味しいと評判って聞いているな。」
「あれ？黒壁くんって甘いの大丈夫だっけ？」
「俺は結構好きだぞ。だけど結衣がカロリー気にして滅多に行けなかったから。」
「だから、結構私を連れてよく行っていたのね。でも何で私を連れていくのよ。」

「いいじゃん。その分勉強教えてやっただろ？」
「数学は教える側だったはずだけど。」
「理系についてはスルーで。」
俺はさすがに苦笑してしまう
理系に限ったらＢクラス中位からＡクラス下位周辺だし
なお、普通に雑談を楽しみ昼休みは過ぎていったのだがＦクラスの雄二と秀吉が倒れた理由は明久に聞いても教えてはくれなかった。

当たり前

しばらくして
「なんだこのボロい教室は。」
「それ私も最初の全く同じことといってたよ。」
俺があっけにとられている。というのもこれはどちらというと廃屋に近いような
「……これはすごいね。」
さすがの工藤も少し引いているしそしてその中に明久の叫び声が印象的になっている
「はぁ面倒くさいなぁ。……それじゃあとりあえず。」
俺は結衣との手を離すとドアを開く
すると
黒いマスクを被った集団
明久に関節技を決める姫路と島田
島田と姫路のパンチラ画像を撮ろうとしている康太
俺はドアを閉める。
「……えっと。」
「……今の何？」
さすがに動揺してしまう。えっと、意味が分からない
「…えっと、お兄ちゃん。今のって。」
「いや。俺たちの見間違いなのかもしれない。ふぅ。」
といいドアを開けると
さっきと全く変わらない光景が
「……あの、帰っていいか？」
「ちょっと春斗助けてよ!!」
「お主の家に住んでいるからこうなったのじゃ。お主が説明してくれぬと戦争の準備もできぬのじゃ。」
木下の弟の木下秀吉がそんなことを言い出すが
「……いや、秀吉これだぞ。絶対話を聞かないだろうが。」
「だからお前を呼んだんだよ。全員戦死にすることなんて他愛もない

だろうが。」
　するとため息を吐く雄二
「お前今日の午後から戦争だろ。」
「別にいい。元々理系中心で攻める予定だったからな。補充試験も受けるし十分だろ。」
「了解。Ａクラス黒壁がＦクラス姫路瑞希に対し日本史で試験召喚戦争を仕掛けます。試獣召喚。」
　すると腕輪を発動すると召喚エリアが発動し、日本史の召喚エリアが広がる。
　召喚獣が出てくると全員の目が見張る
「えっ？先生がいないのに何で召喚エリアが。」
「黒壁くん邪魔しないでください。試獣召喚。」
　島田は驚いたようにしているが、姫路は俺の腕輪がどういった腕輪なのか理解したらしく。姫路が召喚獣を出すとそこに大剣を持った召喚獣が出てくる
【日本史】
　Ｆクラス　姫路瑞希　　３５７点
　するとわっと湧くＦクラスのクラスメイト。まぁ普通なら高得点で叶う人はほとんどいないだろう。
「文系科目で俺に勝てると思うな。」
　俺は一瞬で姫路の首を槍で突き刺す
「えっ？」
　姫路は驚いたようにしているのだが、俺はため息を吐く
【日本史】
　Ａクラス　黒壁春斗　７１０点
　俺の点数が表示され全員が絶句する
　本好きの俺にとって文系科目はかなりに鬼門であり、全部の点数が５５０点オーバーだ。
　特に日本史、現代文。英語は６００点オーバーであり、２位と２００点以上の差が開いている
「戦死者は補習!!」

「えっ？」
　何が起こったのか分からないような顔をしているが、雄二が呆れたようにしている
「伊達に次席を名乗ってないからな。こいつは。姫路ぐらいだったら楽々倒せるさ。」
「島田、これ以上明久に関節技決めるようなら、姫路みたいに補習室送りにするぞ。」
　俺の召喚獣は槍をふるうと島田は睨みつけられるが
「さすがお兄ちゃん。」
　すると後ろから、抱きついてくる。
「へ？」
「お兄ちゃん？」
「えっ？ちょっと、どういうこと？」
　すると誰もが首を傾げている。
　まぁ、説明するか
「俺の両親が再婚がきっかけで苗字が違うけど兄妹なんだよ。俺が家の事情で旧姓を使っているから。」
「うん。だから明久くんと住んでいたお兄ちゃんの家にお邪魔しただけだよ。」
「そういうこと。てか、俺も結衣が来ていること俺も一週間くらいに知ったから。てか結衣離れろ。」
「え～。」
「結衣ちゃんもくっつきすぎだよ。ほら離れて離れて。」
　すると結衣を引き離す工藤。不機嫌そうにしているが
「悪い。助かった。話を進めるぞ。んこんな内戦を俺に沈めさせるなよ雄二。」
「知るか。お前が妹がいることは俺も想定外だったんだよ。」
「あんまり知られたくなかったんだよ。俺の家、家庭環境が結構複雑って言っていただろ。」
　すると少し納得した様子で頷く雄二
「それで、何で呼んだんだ。たったこれだけって訳じゃないんだろ？」

「あぁ、少しBクラス戦なんだが、Cクラスとの宣戦布告を1日ずらすことは。」
「却下。これは貸しを返してもらうぞ。……ってか気づいていたのか。」
「隠す気のなかった癖によくいうぜ。」
「……どういうこと？」
　明久が首をかしげる。
「春斗はわざと情報を流していたんだよ。……多分、Cクラスと協定を結んでいるな。」
「えっ？」
「……つまり、どういう？」
「Bクラスの教室を出汁にしたんだろ？そして多分Dクラスとも協定を結んでいるはずだ。一年間の不可侵ってところか？」
「…まぁ、せめてくるって予告があるのに動かない訳には行かないだろ。」
　俺は遠回りの肯定をする。
「……くそ。完全にやられた。」
「どうしたの雄二。」
「…完全に策を見破られてるんだ。それも、俺が想定していたAクラス戦の戦略が全く使えない。」
「なっ？」
「……どういうことよ。」
「……元々一騎討ちが目的だったんだろ。それくらいじゃないと勝てる要素が皆無だからな。」
　俺が答えると雄二は苦しげに頷く
「一騎討ちならば勝てる要素は多いしな。姫路、明久、結衣、雄二。康太。Aクラスに対抗できる人物が5人もいる。……さすがに他は勝てる要素は皆無だからな。召喚獣の扱いはせめて数十回は必要だ。それならば、その戦いにさせないようにすればいい。」
「……つまり、勝機のある戦いにさせないようにしていたんだよ。情報を提供することも、何か目的があったんだろ？」

「あぁ。……条件付きでよるがその一騎討ちに載ってやる。」
「……えっ？」
全員が驚く。
「……その条件を聞かせてもらおうか？」
「あぁ、条件は３つ。一つ目まずはＢクラスの戦終了後の処理をＡクラスに委任すること。二つ目、一騎打ちのルールはお互いで公正なルール。つまり戦争のルールは話し合いで決めること。そして三つめ。Ａクラスは勝ち星をあげた分だけＦクラスかＦクラス個人への命令権がほしい。」
「……」
すると雄二は考え始める
「……受けなかった場合は。」
「こっちから宣戦布告をして相手をねじ伏せるだけだが。」
「分かった。その条件呑もう。」
軽く脅すと、諦めたように頷く。
「オッケー。ついでに命令権は反対側も有効にする。てかそうしないと私欲だけで戦争を起こすことになるしな。それと最低７対７だ。人数はそれ以下だと明らかに有利はＦクラスだからな。それと、さすがにこれ以下の教室になるのは俺も嫌だし。俺たちが勝ったならもう一個命令権くれないか？」
「別にいいが。」
「なら交渉成立だな。それじゃあＢクラス戦頑張れよ。」
俺は笑う。これでＢクラス戦はＦクラスが勝とうか負けようが関係ない。
ノルマは達成だな
すると教室からでるとジト目で見られると
「……相変わらず性格悪いね。」
「よく言われる。それじゃあサボろうぜ。どうせ。」
するとチャイムがなる
「遅刻で補充試験は受けられないしな。」
「……えっと、でも西村先生には。」

「あの先生は話せば分かってもらえるから。高橋先生にも後から俺が話しておくし、最悪俺だけが怒られるさ。」
さすがに巻き込んで工藤の評価が落ちたら悪いしな。
するとクスクス笑い出す工藤に俺は首をかしげる
「どうした？」
「やっぱり黒壁くんって面白いね。やっぱり黒壁くんのいる学校に転入してよかったよ。」
「お前こそ中学時代はいじられキャラだったのにな。純愛小説見ただけで顔真っ赤になってたのに。」
主に俺と無自覚だろうけど結衣の言葉に顔を真っ赤にしていたなぁ
「ボクだって成長するんだよ!!」
「はいはい。そうムキになるところで何も変わってないのは丸わかりだからな。」
俺は笑ってしまう
「……まぁいいや。工藤。図書館行こうぜ。それなら言い訳も聞きやすいし小さい声でなら話せるしな。」
「まぁ、久しぶりにデートかな？」
「……おい。走るぞ。」
「えっ？」
俺は工藤の手を引き走り出す。ここはFクラスであり、そして須川たちのいるクラス。
つまりどういう事だというと
「これより異端審問会を始める。被告人の確保を最優先にし捕らえろ。」
「「おう。」」
「くそ。彼処でデートとか冗談でもいうべきじゃねーよ。走って生徒指導室まで走るぞ。」
「えっ。うん。」
後ろから来る覆面の奴らから逃げるために

なお、補習室まで逃げ込むことに成功した俺たちは鉄人に事情を話しＦクラスの生徒を説教と呆れながらトラブルに巻き込まれた俺に緑茶を煎れて顔を真っ赤にした工藤と次の時間の開始まで自主勉に明け暮れることになった。

宮田海

「山田久保とスイッチして古典のカバーに。林と大久保は消耗が激しいから補充試験に一旦戻れ。」
「了解。」
声を出しながら前線で召喚獣を振るう。俺は今古典で前線を保っているのだが
【古典】
Ａクラス　黒壁春斗　５０４点　ＶＳ　Ｃクラス　モブ×５　平均１４０点
「なんだよ!!あのバケモンは。」
「ちょっとこっちに救援を頂戴。」
絶賛Ｃクラスに化け物扱い。及び無双をしていた
元々古典は文系の中では一番低く５５０点ぴったりだったんだがそれでも学年一位の座は揺るがずダントツでトップだ
霧島と久保も古典では４００点を超えておりあまり差は１００点もないんだが。
「……」
「あの、隊長傷つくのは勝手ですが早く指揮をしてくれませんか？」
するとポニーテールの女性が俺に話しかけてくるのだが
「……いや、宮田。必要ないだろ。今のところは前線を保っているしばらくはこのままでいい。」
その必要はなさそうだった。完全に力の差が出始めている
「元々特化型が多いとはいえＣクラスは俺らよりも総合点は低い。俺と久保は俺は文系特化だからな。」
「……なるほど、それじゃあ私はサボっていいですか？」
「ざけるな。……てか俺がいえることじゃないが何でお前が１０位以内に入っているんだ？」
宮田は霧島に報告した成績は綜合８位の猛者で総合が３９００点オーバー
「それはあなたにだけは言われたくありません。」

「……はぁ。スイッチ。」
「ちょ。」
俺は一体を引きつけ宮田の召喚獣になすりつける
まぁ大丈夫だろうと思い点数表示を見ると
【古典】
Ａクラス　宮田海　４０９点
「……は？」
俺は点数を二度見してしまう
するとだるそうにしていた宮田の召喚獣が一瞬で相手に近づき一瞬でレイピアを突きつける
「…ちょっと。何しているんですか～？」
「お前。点数ごまかしていたのかよ。」
「だって３００点くらいだったら普通なら近衛部隊に入れるじゃないですか～。動かないで済みますし。」
「……はぁ。……まぁいいや。とりあえず今日はほっとくけどお前一騎討ち強制参加させるから。」
「げぇ。」
「おい。お前女性だろ。そんな声出すな。」
「仕方ないじゃないですか～メンドくさいですし。」
はぁ、なんかこいつと話していると
「お前。絶対ただいい教室でとかじゃなく自分に合う為のスペックの男子を捕まえる為にＡクラスまで来たんだろう？」
「……やだなぁそんなことないじゃないですか～」
するとＣクラス全員の召喚獣が下からでる針山で串刺しになる
「……腕輪の能力は針山って感じか。こりゃ強力だな。でも今回は模擬戦だぞ。」
「めんどくさかったんでただ殲滅しただけですから～気を。」
「……堂々といえるお前は怖いわ。まぁいいや。前線を上げるぞ教科は現文に変更。杉谷。先生を職員室から寺井先生をつれてきてくれ。」
「分かった。すぐに連れてくる。」

すると杉谷が急いで職員室へと向かう
というよりもなんか思った以上に批判されないよな。
なんか思った通りに動いてくれるし、
俺がいたＦクラスが異常だっただけだろうか？
「まぁいいや。それじゃあ前線をキープしながら押し込むぞ。後３０分後休戦規約になっているしな。」
「は～い。それじゃあ副代表文系なので。」
「お前も働け!!」
俺は少しため息を吐く。
Ｃクラス戦の序盤から押しまくっている中で話す余裕があるほど戦勢は優勢だった。
「……今日はここまでだな。」
俺が時間を見る。
「Ａクラス今日の試召戦争は終了。後は明日になるからな。お疲れ様。」
と俺たちはＣクラスの中に入っており、それでいて近衛部隊と戦争を行なっている途中でのことだった
「……とりあえず模擬戦はここまでかな。腕輪こいつが一回使ったけどどうだった？」
「えぇ、さすがに少し一対一とは違うわね。補習もなしだからいい予行練習になったわ。」
小山が感じたことはこちらも頷く
「こっちも久保が一回戦闘不能になったし後は佐藤が別隊で一回戦闘不能だったか？」
「えぇ。伝達部隊ではそうなっているわ。しかし、こっちはほぼ全員戦闘不能になっているし。特に霧島さんを出せなかったことが少し痛いわね。」
「やっぱり将来的な仮想敵国ってＡクラスか。」
「まぁ２年はＢクラスだけど三年になったら受験勉強でほとんど成績が優劣がつきづらくなるから。」
「……お前もしかして点数調整して代表に入った口か。」

「ええ、学園長にお願いしてＡクラス並の点数であれば、ＣかＤの代表にならせてほしいとお願いしていたのよ。」
　なるほどな
「まぁ、２００点代後半を出すＣクラス代表なんか聞いたことがなかったし、まぁ納得だな。とりあえず……今日はちょっと削られすぎたから少し補充に回すか。Ｆクラスと協定を結んだからＣとＢの教室を無料で交換できるけど。」
「……そんなことできるの？」
「Ｆを脅しての戦後会談を仕切らせることになっているからな。」
「また脅したんですか？」
「脅したっていうよりも一方的な虐殺ですよね。あれ。工藤さんが言ってましたよ。相手の戦法を見抜いて一方的に条約を取り付けたって。」
「……絶対あなただけは敵に回したくないわね。」
　小山は呆れたようにしているが
「別にいいだろ。これが俺のやり方なんだし。」
　弱みに付け込みそこを集中狙い
　少し引いているのだが
「……まぁ、でも霧島の提案を却下しとけばよかったって反省中。正直かなり勝ち目薄いんだよな。特化型偏り過ぎだし。最低でも交渉で有利にするか、姫路か明久のどちらかを勝たないといけない。……Ｂクラス戦ではその二人がやっぱり目立っているしな。」
　工藤の報告により１００点代の点数でありながら多くの敵をかわし続け４００点以上の理系で敵を焼きつくす姫路はやっぱり士気の高いＦクラスに主戦力であり、今日はＢクラス前まで前線をあげている
「……はぁ、まぁ俺たちはとりあえず和平ににて終戦。条約は一年間の不可侵でいいか？」
「ええ。それでいいわ。それと、Ｂクラスには自分たちの力で攻め込むから別にいいわ。」
「それじゃあ、模擬戦争を終える。簡単な書類だけ取っておくぞ。」

「ええ。」
すると調印し終える。これでとりあえずは終わりだな
簡単な挨拶を終えると
「黒壁くん終わった？」
「……木下か。」
「ええ、せっかくだから一緒に帰らない。あれをお願いしたいんだけど。」
「……別にいいけど。」
俺はため息を吐く。明久と結衣に晩飯はいらないと連絡する。それとあの情報も添付しておく。
「……これでいいか。」
パタンと携帯を閉じると俺は木下の元に歩く

Ａクラス作戦会議

「んじゃ行くか。どこら辺？」
「えっと水無月くらいまでいいんじゃないかしら。」
「それは土日にしようぜ。今日はファミレスで勉強会でよくね？てか、カノネコ映画化しているから土日に見にいきたいんだけど。」
　俺は歩きながら
「あっ、それは見にいきたいわね。……今日発売の欲しい本があったのだけど。」
「……あぁ。なるほどな。」
　大体欲しい本は分かるのがちょっと嫌だよなぁ。
「あのした発売日今日だっけ？俺も買おっかな。」
「あなたもハマっているじゃない。」
「いや、さすがに用途は違うけど、まぁ本自体は面白いしな。」
　普通の会話のように見えるが、まぁ内容はひどいものだ。
　いわゆるラノベ。それも木下に限ったらＢＬ本の話だ。
　まぁ、偶然に木下を見かけて、買いづらそうな本を買ってやったことがきっかけに仲がよくなったんだよなぁ。
　まぁ、俺もアニメやラノベの布教をしたら、お互いにラノベやオススメのアニメを開拓するようになったいわゆるオタク仲間みたいなものだ
「……う～ん。まぁ俺はパスかな。今月はちょっと節約したいな。映画は優待あるから見れるけど。」
「優待券あるの？」
「あぁ。もう一枚あるけど行くか？」
「えっ。いいの？」
「結衣誘おうと思っていたけど、そういや木下はこういう系大丈夫だっけ。」
「林さんもあぁいうの読むの？」
「いや、漢字が読めないからあいつは映像系だけ。あいつは小学生の漢字も危ういから。」

「……それって本当に大丈夫なの？」
「大丈夫じゃないんだよなぁ。」
　俺はため息を吐く
「それじゃあ駅前の本屋行ってから、ファミレスはどうだ？一応明日補充試験だし、文系見直しておくぐらいはできるだろ？家では新刊みたいと思うし。」
　まぁ遠回しだけども意味は通じるだろう
「そうね。私は消耗したのは……日本史と世界史ね。」
「明日は四限までは補充だからな。お前なら一時間の復習でなんとかなるだろ。とりあえず本屋行こうぜ。買って来てやるから。」
「いいわよ。自分で買うわ。」
「……隠すんじゃないのか？」
「別に。あなたを見ていたら私がバカらしいじゃない。……それに一度助けてもらっているし。」
「……お前を泣かせておいてか？」
　一度俺と木下は秀吉のことで大ゲンカと言えることをしたことがある。その時に一度泣かせてしまったんだが
「……それでも、私の恩人なのは変わりはないわよ。」
「もうやってないだろうな？」
「えぇ。……でも、あんなに喧嘩したのって秀吉を除けばあなたくらいよ。」
「喧嘩できる仲ってそんなにいないしなぁ。てかあの時は大人げなかったよな。本当今更だけど。」
　あの時はかなり気まずかったからな。仲直りした後でも少しちぐはぐだったし
「まぁ、秀吉も秀吉だけどな。まったく演劇で女性役が多いとはいえ女子の服装のまま公衆を歩くなつーの。女顔だし女性の服きたらそりゃ女性と間違えられるわ。」
「……そういや、あなたって髪留めする前から私と秀吉をちゃんと区別がつけているわよね？認めたくないけど、私と秀吉って結構似ているわよね？」

「そうか？俺はあんまりそうだとは思わないんだけどな。」
実質見分けがついているわけだし、秀吉よりも木下の方がかわいいしな
結構子供っぽいところとか、意地はっているところとかそういったところを俺にはよく見せるからだろうか？
「……何よ。」
「別に。何でもねぇよ。ほらさっさと行こうぜ。」
俺は少し早足で駅へと向かう。
「えっ。ちょっと。」
「……秀吉と比べんな。お前は自己評価低過ぎなんだよ。」
「……どういうことよ。」
「自分で考えろバカ。」
「なっ。バカって何よ。」
ぎゃあぎゃあ言い合いをしてしまうがでも、
その姿が綺麗だったということは俺だけが知っている話だ。
「……それでここは。」
「あっ。なるほど。」
とファミレスで俺は数学を木下に見てもらっているのだが
……近いんだけど
俺の隣に４人席でも関わらず隣に座っている木下を横目で見る
勉強を教えるからといって隣の席に座っているのだが
一時間超えた辺りから集中力が途切れつい木下の方に向いてしまう
とりあえず一区切りをついたところで
「悪い。集中力切れた。」
と一旦途切らせる
俺は苦手科目だと集中力があまり持たず1日一時間くらいしか持たないのだ
「……早過ぎない？」
「今日はもった方だろ。一時間半くらい続いたぞ。」
ドリルは１５ページくらい進んでいるし、何よりも木下がいたおか

げで効率的にできたし
　木下は呆れたようにしているが
「てか、計算問題ならなんとかなるんだけど。証明がやっぱり鬼門だよなぁ。正答率酷すぎだろ。」
　勉強の話に逸らす計算はぶっちゃけできるのだが図形問題が鬼門で正答率が４割程度くらいしかない
「……はぁ、まぁそうだけど。あんたって苦手科目になると。」
「分かっているから言うな。でも助かる。」
「基礎は抑えているから後はコツさえわかればもっと取れると思うわよ。」
「……そのコツが分かればなぁ。」
　俺は数学のノートを見直す。
「……はぁ。まぁありがとうな。勉強見てあげるはずが見てもらうことになってしまって。」
「別にいいわよ。」
「……はぁ。理系なんかなければいいのに。」
「そんなこといったってなくならないわよ。」
「霧島は理系強くて５００点オーバーだしなぁ。古典と英語も点数４００点越えだし次も霧島が主席かなぁ。霧島もかなり点数伸びたよな。」
「あなたほどではないけど代表もあなたを意識しているって言っていたわよ。」
「……そうかよ。」
　そりゃ、伸びるよな。
　あいつ４５００点くらいだったのが今回は俺と同じ５０００点オーバーだしな
「……まったくうちのクラスには化け物しかいないのかしら。」
「お前も最近伸びて４０００点まで総合伸びているくせに。」
　特に理系の伸びがすごくもう少しで４００点、腕輪持ちになってもおかしくない
「あなた達が頑張っているのに私たちが支えないわけにはいかないで

しょ。……私も愛子も久保くんも二人を見て刺激を受けているのよ。Aクラスのみんなもそれが分かっているから今日の試召戦争も協力しているんじゃないの。」
「まさか。まぁ、協力してくれたのはよかったけどな。まぁ作戦が色々変更になったけど。」
結構予想外なことが起こったんだよな
「……でもよかったの？元々の協定違反に嵌める作戦を使わなかったでしょ？」
「まぁちょっと色々あってな。少し貸しを作ったんだよ。」
「……どういうこと？」
「もうBクラスの勝てる勝負じゃないってこと。あのバカを怒らせたら俺たちが出る幕じゃねーよ。」
俺がブラックコーヒーを飲む。
工藤からの報告には女性物の便箋がBクラスの男子をFクラスから取ったことを明久に報告している
メールを見ているかは分からないが明久がどうにかすることだろう
「……そういや、あなたはFクラスを意識しすぎじゃない？私はそこまでする必要はないと思うんだけど。」
「いや。逆だよ。Fクラスだからこそ警戒しないといけないんだ。というよりも今現状で俺たちを倒せるのはFクラスくらいだぞ。」
「……へ？」
「Fクラスに姫路がいるからな。ぶっちゃけ姫路さえいなければ俺たちは敵なしなんだよ。姫路に点数を勝てるやつは俺と霧島のふたり、将来的には木下と久保、それと宮田くらいか。工藤はしばらくは康太封じのため保体に集中するだろうし来年以降じゃないときつい。でも今現状は負ける。」
「……つまり黒壁くんか代表が姫路さんとやらないといけないのね。」
「そう。でも、霧島は雄二と戦いたいらしいから俺が姫路と相手をしないといけないわけだが理系を選択されたら終わりだ。あいつは学年2位の理系の点数を持っている。そして明久なんだが、……腕輪持

ちの久保か、そういやお前、数学で４００とってたよな。」
「ええ。一応。」
「それなら木下、そして宮田のうち一人を明久を出さないといけない。雄二は霧島の弱点を知っている可能性があるから。一敗は確定。康太で一勝、そして結衣の家庭科で一勝ってこと。」
「……なるほど、確かに不利ね。」
「……だからきついんだよ。せめて霧島が姫路と戦ってくれたら。確実にこっちの勝負は確実なのに。」
「……それは本当？」
「「うわっ。」」
　と霧島が急に目の前に現れる
「霧島か。びっくりした。」
「……優子と黒壁がいたから。でもそんなに厳しい？」
「……厳しいな。雄二が焦っているから雄二が霧島に負ける可能性はあるけど。幼馴染なんだろ？だから苦手を知っている可能性があるし。」
「そう。」
　少し残念そうにしているのだが
「……だけど、選択権が相手が思わぬところで使ったとなれば別だ。」
「……えっ？」
「教科の選択権を俺に渡せば姫路には確定で勝てる。１００％だ。それで霧島も勝てばいいだけだろ？霧島お前は苦手をＦクラス戦前に克服しろ。小学生の問題から全てやり直せ。」
「……分かった。」
「結衣は何とか知略で封じ込めるとしたら後一人。多分、島田だろうな。木下、多分島田だと思う。島田を挑発して教科選択権をもぎ取ってくれないか？」
「挑発って。」
「悪い。これが雄二と霧島を戦わせる中で一番勝率がいいんだよ。また貸し一つってことで。」
　すると少しため息を吐くと

「……分かったわ。やってみる。」
と頷く
「明久は、久保だと手を抜く可能性があるから宮田でで姫路が俺か。結衣は適当に当てるかどうせ勝てないし。」
とりあえずこれがベストメンバーだろう。今のところは
「……ありがとう。」
「……は？」
「そこまで考えてくれているとは思わなかった。」
「俺がやりたかったことと霧島の目標が重なっただけだろ。それと霧島。お前どうせ雄二に付き合うためにこの戦争を仕向けたんだろ？」
「……えっ？」
「……気づいてたの？」
「生憎敏感なんだよ。まぁ、命令権が欲しいって聞いた時から多分そうだろうなとは思っていたけど。それは俺はやめた方がいいと思うぞ。」
「えっ？」
「……俺の勘だけど、多分雄二も気になっているはずなんだよ。お前のことは。あいつが女子を名前で呼ぶのはお前くらいだろ？」
「……」
すると頷く
「多少なりとも意識はしているはずだと思うんだよ。面倒臭いかもしれないけど、雄二のこと待ってやってくれないか？何となく俺はあいつが何でこの学校を選んだのか分かる気がするんだよ。あいつは学力が全てじゃないってことを証明することにこだわりすぎている。…それを証明する方法がこれだ。」
「……ねぇ、どういうことよ。」
「……雄二は霧島の隣に胸を張って立ちたいんじゃないのか？あいつの過去は知らないけど、それだから最初からこっちのクラスを目標にしているんじゃないのか？あいつにしたらなんか隙だらけの策だったからな。」
多分だけど、そうなんだと思う

あいつが試召戦争にこだわる理由は恋愛感情じゃないかと思う
「まぁ、俺の推測なだけなんだけどな。ただ、そうしたらこの時期に戦争を仕掛けたのも少し納得できるかなって思って。」
雄二らしくないんだよ。今の状況は
情報収集も何もかもが足りていない
穴が大きすぎるんだよ
「……黒壁。それなら雄二にどんな命令をすればいいと思う？」
「命令って。まぁ月2でデート。登下校をなるべく霧島と一緒にするが安定じゃないのか？俺と結衣が付き合っていた時はそうしてたけど。」
「……そういえば林さんだっけ？いつもあの調子なの？」
木下がそんなことを言い出す
「あぁ結衣のことか。まぁ結衣は元カノだけど嫌いになって別れたわけじゃないからな。」
「そういや、そう言っていたわね。でも普段から抱きついたりするものなの？」
「う～ん。親がいなければこんな感じだな。昔からあいつは変わらないし。やっぱりおかしいよな？」
「おかしいっていうより、仲が良すぎるのよ。」
呆れたようにしているけど
「まぁ、友達感覚が抜けきってないだけだろ。あいつ俺が昔のことからあんな感じだったから。……工藤に聞いたら分かると思うけどあいつボディタッチは比較的多いんだよ。元々寂しがり屋だし、工藤にもよく抱きついているぞ。多分時間が経てば木下や霧島にも抱きついてくるんじゃないのかな？」
すると少しだけ嫌そうにしているけど多分すぐ慣れると思うぞ
「てか話逸れすぎ。霧島ならそれだけでも雄二を意識させることはできるだろ。ゆっくりしようぜ。告白するなら雄二からされたいだろ。」
「……（コクリ）」
一度頷く。

「まぁ、この件は勝ってからだ。まずは勝とうぜ。多分ＢクラスとＣクラスが戦争を始めるはずだ。……先ずはそこからだろう？」
「えぇ。それもそうね。」
「……うん。黒壁。ありがとう。」
「別にお礼されることなんてないさ。それに俺も命令したいことがあるし。その件に口出ししてくれなければ。」
「……命令したいこと？」
「あぁ、……これは霧島にとってもいいことだと思うけど。」
と俺の命令を告げると驚いたような二人が印象的だった

開戦前

そして翌日俺たちは補充試験を終えると
「ん～楽しかった。」
「あなたそれテスト終えて最初の一言目がそれなの？」
木下が呆れたようにしているのだが
「いや、だって俺答え合わせに手間取っていたから2教科しか受けてないし。」
「黒壁君、現代国語の回答用紙代表の二倍あったらしいからね。」
「それで何点だったの？」
「８１０点。今回好きな作家の本だったしドラマも見てたから。」
「私も黒壁くんにオススメされて読んだけど。それ、恋愛小説よね。」
「ボクも黒壁くんに勧められたことあるよ。この本。黒壁くんラノベとかアニメとかでも純愛の恋愛小説をよく読むよね？」
「あんまりバッドエンドは好きじゃないんだよ。ナイスボートとか死エンドとか。」
「……」
工藤は一度勧めて反応を見ようと思ったらガチ泣きされたことがあり、そういう系のものは一切勧めなくなったんだよな
まぁ純愛小説を読むのは工藤も同じなんだよなぁ
こいつの反応を見ながら顔を真っ赤にして読む工藤は少し見てて微笑ましいし
「まぁ、一番確率的バッドエンドに少ないのが純愛系だからな。」
「意外ですね。私もこの作家は好きですよ～。」
すると宮田が後ろから話してくる
古典と歴史関係に強くその教科は４００点越え。……楽をしたいってことで文系全部５０点ほど少ない数字を言っていたのだ
「……面白いの？」
「面白いっていうより感動系かな。今回のテストでは冒頭部分だったけどクライマックスはかなりよかったな。」
「そ～ですね～。この作家は最後のオチがうまいんですよね。伏線も

しっかりひろってますし。」
　こいつ恋愛小説が本気で好きなのか生き生きと語っている。
「細かい設定も使い切るのがうまいからな。結構ドラマもオススメ。俳優がうまいからちゃんと期待にそった演技ができているんだよな。霧島読みたいのなら貸そうか？」
「……いいの？」
「この人の本はデビュー作のやつから持っているからな。」
「えっと確か祭りでしたっけ？あれはすごく駄作だと思うんですが。」
「お前よく知っているな。あれ売上酷くて今発刊中止になっているのに。まぁ、確かに面白くないけどな。」
「何で面白くない本まで持っているのよ。」
　呆れ顔の木下に苦笑してしまう。面白くないのに時々読みたくなるんだよな
「そういやＦクラス対Ｂクラス戦終了したぽいな。さっき歓声聞こえたし。」
「あぁＦクラスが勝ったようだよ。」
「やっぱりか。」
「あぁ、最後は土屋くんの保険体育で決着がついたらしい。」
　なるほどな。まぁ、どうせ姫路が使えない以上はこうするしかないか。
「オッケー。多分これで……いつＦクラスが宣戦布告してもおかしくはないな。後可能性があるのはＢクラスとＥクラスだけど。」
「それなんだけど、Ｃクラスが Ｂクラスに宣戦布告したみたいだよ。」
「行動早いな。開戦時刻は？」
「今日の昼休憩終了後らしいね。」
「……さすがにあそこまでお膳立てしてＣクラスが負けたらさすがにセンスがなさ過ぎるぞ。」
「さすがに大丈夫だと思うわよ。それに、うちもそんな心配している暇はなさそうよ。」
「……だろうな。」
「失礼する。」

すると雄二が入ってくる
「…我々、FクラスはAクラスに宣戦布告をする。それでなんだが。」
「一騎討ちだろ？雄二。簡単にルールは作ってある。交渉は俺に一任されているから。」
「……お前副代表だろ。そんなことしていいのかよ？」
驚いたようにしているが
「霧島は雄二が来るって聞いてから勉強に集中しているぽいし余計なことはさせたくなかったんだよ。それにFクラスの内情を知っているのは俺だし大体の戦力は理解してある。それに霧島と昨日偶然会ってルールは簡潔に決めてあるんだよ。」
「なるほど。だから昨日は帰るのが遅かったんだ。」
すると明久が教室に入ってくる。その後ろに秀吉、康太、姫路に島田そして
「お兄ちゃん。」
当然の如く結衣がいた
「……てかFクラスエース格が全員いるのかよ。」
「抱きついているのはスルーなのか？」
「言っても無駄ってことだ。もう諦めている。」
「お、おう。」
少し引き気味の雄二だが話を戻す
「まぁ、とりあえず、久保記録係頼む。」
「分かった。」
「木下と工藤も一応交渉の場にいてくれ、気づいたことがあったら報告してくれると助かる。」
「えぇ。分かったわ。」
「うん。その前に結衣ちゃんは一旦離れようね。」
「え～。」
しぶしぶながら離れる結衣
「……まぁ言いたいことは色々あるけど戦前会議を始めようか。とりあえずこの書類をみてくれ。基本的なルールはここに書いてある。」
そして昨日決めたルールを印刷したものを渡す

「……やけに細かいな。」
「生憎こういったものは隙を作らせないし、お互いに譲渡しあえるように組んだからな。」
　そして項目を読んでいくと姫路が何か気づいたようにしていた
「……あの、規則に応じた特別ルールって何ですか？」
「そういや昨日姫路はいなかったな。勝った方が相手のクラスに対して命令権を一つ寄越すって奴だ。」
「まぁ、簡単にいうなら俺たちのクラスも利益が欲しいんだよ。まぁ、それはお互いに命令権を持っているんならそこも明確にしておきたいってことだ。」
「……それで、命令権のルールは……相手の気持ちを尊重しない命令権を禁ずる？どういうこと？」
「これは明確には、恋愛ごとについてだな。例えば島田須川に付き合ってくれとか言われたらどうする？」
「嫌に決まっているでしょ？ってあぁそういうことね。」
　納得するようにする島田
「……ん？これを翔子が納得したのか？」
　すると雄二が聞いてくる
「あぁ、了承はとったぞ。……それがどうした？」
「いや。俺たちに依存はないが。」
「オッケーこれで交渉は成立だな。開戦は。」
「明日の放課後でどうだ？」
　俺は木下を見ると頷く
「オッケー。それじゃあ３時３０分開戦で。」
「それじゃあ戻るぞてめぇら。」
「そうそう雄二。」
「なんだ？」
「もう少しポーカーフェイス学んだ方がいいぞ。」
「……どういうことだ？」
「さてどういう事でしょうね。」
　木下も分かったのか少し笑っていた。

「それじゃあFクラス戦のメンツを発表するぞ。」
俺が教壇に立つと静寂が教室中に訪れる
出すメンバーを先に知らせるようにしたんでこれで組み合わせるのは簡単だ
「島田戦は木下。須川戦は久保。林戦は佐藤。土屋戦は工藤、坂本戦は霧島。このメンバーでなるべく相手の選択権を全部奪ってくれ。佐藤は正直勝ち目薄いけど。」
「クラスのためなら仕方ないです。」
「悪いな。そして吉井戦は宮田。これは不確定だけど木下か久保が相手に渡した時に使え。」
「は～い。でも吉井くんって確か観察処分者ですよね？それなら教科の選択権なくても。」
「……あいつに勉強教えているんだよ。ルームメイトだから分かるけど日本史と世界史ならばAクラストップ１０に入るんだよ。３００点超えるしな。」
「……何で敵を強くするようなことしているんですか？」
ジト目で見られるけど
「あのな。元々は中間や振り分け試験のために勉強教えていたんだぞ。姫路と一緒に途中退席したからだけど、実際のところBクラスくらいには点数があるんだよ。」
「……えっ？」
「Bクラス並って。」
「実際にBクラス戦では世界史で近衛部隊を多く撃破。第一戦功をあげているらしいわ。」
これは木下が秀吉に聞いた情報だから性格なのかわ分からないけどな
「まぁ、明久戦は宮田に任せるさ。負けても俺が勝てばいいし。」
「一番大切な姫路さんとだからね。」
本当にここを勝たないと水の泡なんだよなぁ
「はぁ、勝てるところを確実にとりたいけど霧島が一応負けるとなるとなぁ。」

「勝てるギリギリのところを取っておきたいということ？」
「そういうこと。一応佐藤以外は全員勝てる可能性がある組合せにしてある。どうせならなるべく多く命令権を取りたいしな。」
俺は一息つく
「それじゃあ……勝ちに行くぞ。」
「「おう（ええ）」」
すると雄二達が入ってくる
……さて開戦といこうじゃないか

Fクラス戦前半戦

「それじゃあ。両名共準備はいいですか？」
「ああ。」
「……問題ない。」
　高橋先生の声で始まる試召戦争に俺たちは笑う
「それじゃあ1教科目の人は出てください。」
「島田頼むぞ。」
「分かったわ。」
　すると思った通りの捨て駒が出てくる
「木下。」
「えぇ、ちゃんと役割を果たすわ。」
　すると木下が歩いていく。
「早い所済ませましょ。どうせ相手にもならないんだから。」
　うわぁ、初手からキッツイことを言うなぁ
「ちょっとFクラスだからって舐めないでよね。」
「事実でしょ？」
　うん。正論しか言ってないな
　でも奥では秀吉と雄二が話している。もうそろそろ頃合いだ。
　俺は目線で合図をすると頷き
「あなたと私では格が違うのよ。悔しかったら私を倒してみたらどう？あなたの得意科目で。」
「しま、」
「えぇいいわ。高橋先生数学でお願いします。」
　よし釣れた。
　俺はニヤリと笑ってしまう。
　これで島田に勝てれば形勢は一気にこっちに偏る。
「それでは召喚してください。」
「「サモン。」」
　幾何学模様も魔方陣が描かれそして二人の召喚獣が出てくる
【数学】

Ｆクラス　島田美波　１８６点
あっやべ。俺負けているじゃん。
数学は今朝補充試験受けたときは１７３点だったしなぁ
「私数学だけに限ったらＢクラス並にあるんだから。」
「……へぇ～それは凄いわね。でもね。」
【数学】
Ａクラス　木下優子　４１０点
「私はもちろんＡクラス並だけどね。」
「「なっ。」」
「４００点越えだと。」
雄二やＦクラスは驚いている。
「あたしだって代表や黒壁くんには負けないんだから。」
そして一閃し一瞬で勝負は決まった。
「勝者、Ａクラス。」
するとＡクラスで歓声が湧く。
そして木下が帰ってくる
「悪い助かった。」
俺は手をかざす。
「このくらい別にいいわよ。……これで負けたら許さないわよ。」
「あぁ、分かっているさ。」
手をパンと鳴らしハイタッチをするとわぁと一際歓声が強くなる。
ふと高橋先生を見ると少し笑ったような顔をした後に
「次の人は前に。」
高橋先生は無表情に戻りそう告げる
「……なるほど。メンバーを先に告げるってこういうことかよ。須川頼む。」
「了解。」
「久保。選択権を使っていいから確実にやれ。」
「「なっ。」」
「久保だと？」
さすがにＦクラスは予想外だったのか

久保は姫路級の大物で今回の試験では第４席を奪ったほどだ。
「それじゃあ総合科目でお願いするよ。」
「はい。承認します。」
そして二人の召喚獣がでてくるが試合は一瞬で終える
【総合科目】
Ｆクラス　須川亮　　６８０点
ＶＳ
Ａクラス　久保利光　４５１８点
召喚獣の腕も関係ない学年主席並の一撃になすすべがなく須川の召喚獣は倒れてしまう
「……うぉ。すげぇ。」
「黒壁くんはもっと取れているんじゃないの？」
「いや、普通ならこれが主席レベルだぞ。三年の主席ってこの点数くらいだし。」
俺と霧島がトップ争いしていたからそればっかり見ていたけど
「……ついでに黒壁くんは総合何点なの？」
「５０００点は超えているぞ」
「化け物ね。」
「……黒壁は高校に入って総合が１５００点伸びているから。」
「最初第六席だったのにいつの間にか抜かされていたからね。」
久保が帰ってくる。
「まぁ、いい数学教師ができたからだろ。分かりやすいし。久保もかなり伸びたよな。」
「６００点くらいならまだまださ。それで次は。」
「多分康太だろうな。ここで１つは勝たないと面目立たないし。」
「次の人はどうぞ。」
「……」
するとやっぱり康太が出てくる
「んじゃ、工藤頼んだ。」
「うん。任せて。」
すると工藤が前にでる

「土屋くんだっけ、随分と保健体育が得意みたいだね。」
　すると康太に話しかけている
「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね。」
　お前が言っているのは運動の方だろ。
　恋愛面に関してめちゃくちゃ奥手だしな。
　まぁ、そのことについては後からからかうか
　するとあっちでは雄二達が何か戸惑っていると目線で俺の方に助けを求めているが無視しておこう
　何となくやばそうな気がするし
「そっちのキミ・・・・吉井くんだっけ？保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」
「ふっ望むとこ。」
「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらないわよ!!」
「そうです!!吉井君には永遠に必要ありません!!」
　するとFクラス陣からの声が聴こえてくるんだけど
　……なんかあいつら少しだけイラっとくるな
「……なるほど。あんたが言っていたこと少しはわかる気がするわ。」
　すると木下が少しため息を吐く
「みんな何言っているの？保健体育って試召戦争の教科の一つじゃないの？」
　そして無知の結衣が首を傾げる
「林さんは知らないでいいわよ。」
「えっと。どうしても知りたかったら工藤に聞け。保健体育に関しては俺よりも詳しいしな。」
　俺と木下がありのままに答える
「えっ？」
「うん。愛ちゃん後から教えてね。」
「えっ。黒壁くん。」
「自業自得だアホ。言葉の責任くらい負え。」

純粋な笑顔に怯む工藤。これはいじるとかじゃなくてお前の責任だな。
「時間が押していますので早く召喚してください。」
すると高橋先生から警告が出される
「……サモン。」
「サモン。」
すると二人の召喚獣が出てくるとすぐさま工藤が接近戦を持ち込む
【保健体育】
Ａクラス　工藤愛子　４９３点
すげぇ伸びているな。工藤ここまで保体でここまで伸びるとは
「理論派と実技派、どっちが強いか見せてあげるよ。バイバイムッツリーニくん。」
斧を振るおうとする工藤の召喚獣に対して康太は落ち着いた様子で腕輪を発動させる
「……加速。」
「えっ？」
「加速終了。」
【保健体育】
Ｆクラス　土屋康太　５６７点
その上を行くんだよなぁ
「そ、そんな、この、ボクが。」
「……」
分かってはいたがやっぱり工藤を捨て駒にするのは胸糞悪いな。
……でも康太に運良く勝てるとするならば工藤しかいなかった
俺は頭を何回かかく。
そして工藤が戻ってくると
「…後は任せろ。」
小さく耳元で呟く。
こいつの負けは絶対に犠牲にはしない
「次の人はどうぞ。」

「私が行くね。教科は家庭科でお願いします。」
「佐藤。悪いけど。」
「はい。行ってきます。……絶対に勝ってくださいね。」
「任せとけ。」
　すると前に出る
「それじゃあサモン。」
「サモン。」
　すると結衣の召喚獣が出てくるのだが。その手には弓と矢が
「……弓か？珍しいな。狩人モデルの召喚獣は。」
「弓？つまりは遠距離タイプなの？」
「近接戦は向いてないけどそれでも。」
【家庭科】
　Ｆクラス　林結衣　７１２点
　　ＶＳ
　Ａクラス　佐藤美穂　４１９点
　佐藤も高いけど結衣にははるかに届かない
　一本のものすごい速さの矢が佐藤の召喚獣を貫く
「勝者Ｆクラス。」
　するとあちらの歓声が湧く
　湧いているんだが雄二は苦しげな表情を浮かべる
　この勝負圧倒的に有利なのはこっちになっている
　前哨戦はこっちの勝利と言えるだろう

Ｆクラス戦後半戦

「それでは次の人お願いします。」
「……これを落とされたら意味がないな姫路。」
「はい。」
「んじゃ、俺だな。」
俺が立ち上がるみんなが息を呑む。
ここが大一番だとわかったんだろう
「教科は現代国語でお願いします。」
「了承します。」
高橋先生が告げる
「それでは召喚してください。」
と呼び出される召喚獣だが
一瞬で決着がつく
【現代国語】
Ａクラス　黒壁春斗　８１２点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　３８２点
「「「はぁ!?」」」
味方敵問わず大声が上がる
俺の好きな本の問題ばかりだったので余裕の８００点オーバーを記録したんだよなぁ
「悪いな。ここで負けたら後がないんで。」
一閃すると一瞬で姫路の召喚獣は戦死する
「勝者Ａクラス。」
誰もが静まり返る。
呆気に取られるものがほとんどだ
「悪いけど明久をバカにしたり暴力を振るうような奴に手加減するつもりはないから。」
「えっ？」
俺はそう一言だけ呟くと自分の陣に戻る

「……あんた。現代国語点数おかしいわよ。」
木下が呆れたようにしているのだが
「今回その分物理と化学が低かったんだよ。総合５０点くらいしか上がってないし。」
夜に勉強していた物理と化学は勉強時間が一時間以上だったこともあり、あまり勉強した意味がなかった。」
「……物理と化学が振り分け試験のテストのままだったら私総合科目負けていた。」
「げっ、マジかよ。」
「うん。１２点差で。」
「代表と黒壁くんまだ点数上がっているの？」
工藤が少し涙目になっているがちゃんと話せるくらいには復帰している
「……これで3勝2敗。」
「あぁ。後は明久と宮田、そして雄二と霧島か。宮田お前そういえば教科はどうするんだ？」
準備をしていた宮田に聞いてみると
「日本史か世界史にしようと思います。」
「……古典じゃなくてか？」
古典は明久の一番苦手科目だと伝えているのだが
「はい。ダメですか？」
一応４００オーバーの教科だが負ける可能性はある
いや、負ける可能性の方が高いだろう
「……問題ない。私が勝てばいい。」
霧島が言うと俺は苦笑する
「別にいいぞ。思う存分やってこい。」
「ありがとうございます。」
すると戦場に歩いていく。
「えっ？止めないの？」
木下がいうと
「まぁ、代表の意見は俺より強いからな。それに、宮田が負けてもまだ

こっちには霧島がいる。……それに前ミーティングでは任せるって言ってあるし。どっちにしろこいつは日本史世界史共に俺の次だからな。好きにやれ。それに。」
俺は一呼吸置いて
「油断してない霧島が負けるわけないだろ。」
ただでさえ点数おばけの霧島だ。全教科隙がないので大丈夫だろう
「……まぁ、それもそうね。」
「そういうことだ。」
雄二達からは明久が出てくる。まぁ当たり前か
「それじゃあ教科は何にしますか。」
「日本史で～。」
「へ？いいの。」
明久は驚いたような顔をしているが、頷くと
「はい。その代わりなんですけど、ちょっと聞きたいことがあるんですよ～いいですか？」
「うん。いいけど。」
するとヘラヘラしているようにしていたのだが、急に真剣な顔つきになって
「……なんであの女の子の為に自分のゲームや漫画を売ってまでお金を集めたんですか？」
「へ？」
なんの話をしているのか全くわからないのだがどういうことだろうか。
「多分ですけど観察処分者になったのもそれが影響していますよね～。せっかく西村先生から没収されたゲームと取り返したのに使うっていう選択肢はなかったんですか。」
……そういや、明久が観察処分者になったのって西村先生の私物を古本屋で売ったからだったな。
俺が雑用係を請け負ってすぐに、観察処分者の吉井について話してくれたことがある

『確かにあいつはやってはいけない行為をやった。しかしそのおかげで救われた人がいる。だからこそ俺は退学や休学ではなく観察処分者にしたんだ。』
つまり女の子の為にこいつは鉄人のロッカーから自分のゲームを売る目的で奪い取ったのだ
そこで鉄人の古本に手を出したのだろう
……あいつもうちょっとやり方があるだろ
さすがに呆れてしまうが。
……でもあいつらしいな
それと同時に納得してしまった俺は悪くないだろう
「だって泣いてるの子がいたんだよ。」
「……へ？それだけですか？」
「うん。あれ？なんかおかしいかな？」
俺も雄二も秀吉も康太も呆れたように明久を見る
おかしいに決まっているだろ
おかしいところしかない
他人の為にそんなに尽くすことができる
「……」
あっけにとられていた宮田
「なんだ。そんなことだったんだ。」
力が脱力したようにしているのだが
「それなら、私も本気で行きますね♪サモン。」
「へ？」
と召喚獣を出すと
【日本史】
Ａクラス　宮田海　４５４点
点数を表示されると雄二達も驚いたようにしている
宮田が点数ごまかしていたせいで俺たちも知らなかったが、今年から久保を抜かして学年３席
両親が歴史と古典の教師らしく、よく教わっていたらしい
全て３２０点以上であり、３教科で腕輪持ち

これが俺たちの切り札だ
「こっちだって負けられないんだ。サモン。」
明久も召喚獣を呼び出すと
【日本史】
Ｆクラス　吉井明久　３８２点
するとＦクラスはもちろん。Ａクラスも知らなかったのか驚く人が多い
まぁ、日本史と世界史は漫画やゲームが多く販売しているのもあり、明久が取り組みやすい教科なので最初はこればっかりやっていたのだが
取り組むと案外呑み込みが早く、物の覚えは悪くはなかっただけだ
しかし、６０点台が半年で３００点代後半まで上がるとは思わなかったけど
……やっぱこういった場面には強いのが明久だよな。
「聞いてたとはいえ、さすがに凄いわね。」
「元々大舞台では強いイメージだからな。一応Ｆクラスで前線にいながら一度も補充試験に戻らず前線で戦っているだけはあるだろ。」
あいつ本番に強すぎだろ。
すると先にレイピアで一直線に接敵する宮田の召喚獣。
このクラスでは珍しいレイピア型の召喚獣が接敵する
明久は左側に避けカウンターを入れようとしたのだが走り抜いていたので距離を取り止まったらまた明久の方を向きでそのまま突っ込んでくる
……うわっ。動きエゲツないな。宮田は相打ち覚悟で特攻。それも高橋先生だからこそできる戦法で明久を追い詰めている
高橋先生のフィールドは他の先生よりも数倍強くできている。その理由は総合科目による性能の上昇にある
エンドレスで取れる文月学園のテストでは総合科目はかなりの力を持っている
俺に限ったら総合科目は召喚獣が実体されないようにしているくらいだ

そしてまた突進しようとすると
するとサイドステップを踏み横にずらしそして
腹に思いっきり木刀を叩き込む
宮田海　３１２点
さすがにこの点数ならば一撃１５０点以上は喰らうかと思った矢先だった
下から大量の針山が現れ明久の召喚獣は避ける間もなく串刺しになった
吉井明久　ｄｅａｒ
「勝者Ａクラス。これにて、Ａクラスの勝利とします。」
するとため息が聞こえる
「ぎゃー体中が痛いよう。」
「えっ？あの。」
「ヤベェ。忘れてた。明久。大丈夫か～。」
「うぅ。全身が痛いよう。」
すると涙目になる明久。
「どうしたのじゃ。」
「観察処分者のフィードバックだよ。」
「あっそうでした。大丈夫ですか～。」
宮田も少し苦々しく明久の方を見る
「だ、大丈夫。」
それでも痛そうにしているのだが少し顔が赤くなっていた
「しっかしうまく誘われたな。あれはさすがの俺も明久も無理だろ。カウンターと同時に腕輪使うなんて。」
俺は針山ってことを知っているのだが
「タイミング間違えれば自分も戦死、自分だけ戦死ってこともあったし。お前腕輪の使い方かなり練習しただろ。」
「え～なんのことですか？」
ニコニコ笑っている宮田を見るとため息を吐く
「……まぁいいや。てかお前日本史。あんなに伸びてたのか」
「うん。少しでも勝ちたかったから。」

「島田が最大の原因だろ。俺に選択肢を渡ったら勝ち目はないには雄二がわかりきっていた。てか彼処を雄二が秀吉じゃなかったほうがおかしいんだよ。捨て駒だったら、何事でも動じない秀吉の方が最適だ。」
「……深読みしすぎていたんだよ。お前のことだから島田の数学で教科選択権を使わせようとしているんだと思っていた。」
　苦々しく雄二がため息を吐く
「あのなぁ。俺数学で一度も島田に勝ったことないのにそんな危ない橋渡れないだろ。」
「……お前本当に極端なんだな。」
「お前らよりはマシだと思うけど。俺Ｂクラス中位クラスだぞ。理系は。」
「……はぁ。負けだ負けだ。これはどうやっても勝てねえよ。翔子。決勝戦は不戦敗でいい。」
　すると雄二がそんなことを言い出す
「……いいの？」
「あぁ。もう負けは確定しているんだ。それならまた今度勝てる時にその勝負を挑むことにするばいいしな。」
「最終目標が俺たちってことは変わりはしないんだな。」
　まぁ妥当な判断だろう。それにまた挑むことがあるとすればそれは武器になるしな
「まぁ、宮田が学年三席だし、今年Ａクラスも結構ごちゃごちゃしているんだよ。Ａクラストップ１０に限れば総合平均点がいつもより数倍高いしな。」
「……おい待て、久保が学年４席だと。」
「私も総合は４５００点オーバーですよ～。」
「主席レベルが５人もいるんだ。今年は。木下も４３００点代だし。負ける要素が見つからないんだよなぁ。」
「代表と黒壁くんがまだ成長しているからみんなついていけるように必死なんだけどね。」
　だからこそこのクラスは強いんだよ

「というよりも吉井くんも日本史本当に強かったんだ～。」
「春斗にかなり鍛えられたからね。」
「まぁ、日本史は参考資料が多くあるしな。」
漫画やゲームなど明久のやる気にさせる物がいっぱいあるし
「とりあえず戦後会談は全員揃ったら始めるぞトイレとかいきたいやつは先行ってこい。長くなるから。」
すると俺は一旦区切る

戦後会談

工藤たちも全員揃ったところで俺は前にでる
「それじゃあ全員揃ったところで戦後会談と行きますか。それじゃあ、まずは木下から。」
「ええ、それじゃあ、Ｆクラスの人には多分この後の授業と補習をあると思うのだけれど後から報告するメンバーはＡクラスで受けてもらうわ。」
するときょとんとするＦクラスと俺
「えっ？それ俺の命令。」
俺が昨日告げた命令の一つである
「あなたは他にもしたい命令があったんでしょ？それなら私の分を使ってもいいわ。その代わり今日と明日少し付き合ってほしいことがあるんだけど。」
「……はぁ。用事に付き合えってことか。了解っと。」
多分
「ちょっと、どういう事？」
「簡単に僕達がＦクラスに教えるんだよ。まぁ、ＦＦＦ団以外とか明久に理不尽に暴力を振るわない奴とか色々規制をかけた上でな。雄二と霧島が代表同士が監督していた場合のみ許可をもらっている。……まぁ結衣のためだな。さすがにあそこで勉強させたくないし。」
「……シスコン。」
「うっせ。家族の心配して何が悪い。」
少し霧島の言葉にふてくされてしまう
「それでメンバーは誰だ？」
「雄二、秀吉、明久、康太、結衣くらいか？今のところは。」
「えっ？姫路さんは？」
「明久に関節技掛ける時点で省いた。」
「……まぁ、暴力沙汰に関してはお主はとことん厳しいからのう。」
「まぁ、昔ちょっとあってな。」
少し苦笑してしまう。

「ということで次久保。」
「僕の方は終わったよ。」
　すると少しショックを受けている久保の姿があった
「……。」
　あ～康太に注文していたのか
「了解。それじゃあ次は康太。」
「……久保の拒否権に使った。」
「……了解。」
　それで久保は落ちこんでいるのか
「次結衣。」
「は～い。えっと個人的なことでもいいんだよね？」
「あぁ、付き合ってとかそういうの以外ならな。」
「……それなら、木下くんのお姉ちゃんと愛ちゃんに聞きたいことがあるんだけどいいかな？」
「聞きたいこと？」
　首を傾げる木下に
「うん。私は後からでいいよ。」
「えっと、それじゃあ。あとは次は俺か。それじゃあ、とりあえずＡクラスへの休戦期間を６ヶ月に延長する事。」
「なっ。」
「３ヶ月後期末前だろ。さすがに勉強の追い上げ時期に試召戦争やられたら溜まったもんじゃないしな。俺以外。」
　理由を告げるとすると全員が納得したようにする
　ここの期末や振り分けはかなり厳しめに採点される為かなり重要なのだ
「まぁ、これは元々案にいれてなかったしな。それと俺はもう一つ使っていいんだよな？」
「……うん。」
　霧島が頷くと俺はそれならと思い
「それなら、ＦクラスはＡクラス教室に許可された奴以外入室を禁ずる。」

「「「「「なっ。」」」」」
「……えっ？」
「てか散々なんだよ。暴力沙汰が起こったり追いかけられたり。女子と話したからって追いかけられたりするのは。少しくらい安息の場所くらいほしいわ。」
　毎回被害にあうんだよ。木下や工藤と仲がいいし。
「特に須川、横溝、島田、姫路は今のところは絶対に入れさせないからな。」
「えっ？ちょっとなんで姫路さんたちが。」
　明久が抗議するが
「これは満場一致で決まったよ。このメンバーは今の所はな。明久に理不尽なことで関節技をかけたり俺にカッターナイフを投げたりする奴らなんか入室を禁じられるのは当たり前だ。ついでに破ったら、一日中、船越先生か鉄人の補習を受けてもらうから。ついでにこれも許可は得てる。」
　学園長に聞いたから大丈夫だろう
「やっぱりこれがお前の目的だったか。結構理不尽なことに巻き込まれてたしな。」
「これでも軽い方だぞ。接触禁止じゃなかっただけマシだろ。まぁ、でも大体の奴らがブロックになりそうだな。」
　本当にほとんどの奴らがＡクラスにすら入れないと思うだろう
「まぁ、こればかりは仕方ないのう。それに少し姫路も島田もやりすぎなところはあった。だが厳しすぎると思うのじゃが。」
「ぶっちゃけるとこれほとんどのＡクラスが賛同しているし、軽すぎるといった人も多いんだぞ。」
　なお反対意見はどうでもいいという霧島と宮田くらいだった。
「それにちゃんと救済措置はあるし、結構軽い方だと思うぞ。」
「……救済措置？」
「うん。言っただろ、問題があるから結衣を隔離させるって。」
　すると雄二は納得する
「なるほどな。つまり、問題がなくなれば一緒に授業を受けることが

できるってことか？」
「そういうことだな。一番はなくなれば解消されるってことだ。まぁ、ちょっとは懲りろって話だよ。」
「でも、ボクと雄二もよく喧嘩すると思うんだけど。」
「喧嘩と一方的な暴力は違う。」
「なるほど明確な定義だなそれ。」
「ほへ？」
首を傾げる明久に俺はため息を吐く
「まぁ、俺は終わり。宮田。」
「……それじゃあ明久くん。」
すると、名前呼びに変わっていることが気がつくのだがそこはスルーで。
「えっ？ボク。」
「うん。私のこと『うみ』って呼んでね♪」
「……えっ？それだけ。」
「うん。それとメアド交換しよ。こっちはお願いだけど。」
「うん。そのくらいなら。」
「それは後でやってくれ。次霧島。」
俺が呼ぶと
「雄二。……これから毎月月に二回デートをして。」
「……えっ？」
Ｆクラス、また知っていたＡクラスの奴らはポカーンと口を開けている
「……やっぱり、お前、まだ諦めてなかったのか。」
しかし雄二は
「私は諦めない。ずっと雄二のことが好き。だから付き合ってって命令したかったけど。制限をつけたから。」
「その代わりにデートはちゃんと雄二がプランニングすること。デートは割り勘でもいいけど。」
「割り勘でいいのか？」
「高校生の男子に全額負担にしたら数万は出費行くぞ。それを毎月続

けるのであれば割り勘は必須だぞ。」
「まぁ、せち辛いですけど高校生だから仕方ないと思いますよ～。」
　宮田は頷く。こいつ口調はなんだけど思っていたよりも常識は守っているな
「まぁ、デートのプランニング大変だから覚悟しとけよ～。それも誘う時は雄二からな。」
「は？」
「霧島の命令なのに霧島から誘うバカがどこにいるんだよ。雄二が誘ってこそのデートだろ。」
　俺はニヤニヤと雄二を見る
「お前面白がっているだろ。」
「まぁ半分はあたりだな。少し面白がっているのもあるけど。まぁ、純粋に雄二が無理やり付き合わされるのが嫌だと思ってな。」
「どういうことだ？」
「告白の手順くらい男にやらせろって話だ。」
　誰にも聞こえないくらいに小さな声で言う。すると雄二は嫌そうにしているが
「お前本当いい性格しているよな。」
「生憎、雄二とも半年の付き合いはあるからな。友達のことくらいなら誰が好きなのか分かるさ。だから、ゆっくり機会を改めてゆっくり考えろ。霧島との関係を。」
　俺はそうやって話を切る
「それじゃあこれにて戦後会談を終了するか。それじゃあ後は鉄人おねがいします。」
「お前は西村先生と呼べないのか。」
「まぁそんなことといいじゃないですか。問題児の雄二と明久は俺がしっかり見ておきますから。残りのＦクラスの指導お願いしますよ。」
「……言われなくても分かっている。」
　すると俺はニヤニヤと笑う
「それじゃあ今から我がＦクラスの補習について話そうと思う。」

「……我が？」
「Ｆクラスは戦争に負けたことにより担任が福原先生から私に変わるそうだ。これから一年、死ぬ物狂いで勉強できるぞ。」
「「「「何!!」」」」
　すると大勢の生徒が悲鳴をあげている
　まぁ鉄人の鬼の補習は有名だからな
「ちょっと先生。木下さんの命令は認められないんじゃないの。」
「あぁ、木下があんな命令をしたのは驚いたが、それは認めている。生憎暴力は教師側でも見過ごせないのと、Ａクラスの次席と主席が勉強を教えるとなればな。」
「学校の教育の方針は守っているし文句は言われることではないと思うけど。」
「……雄二と一緒にいられればそれでいい。」
「お前本当にブレないな。まぁ、お前らがどう変わるかわ俺は知らん。でも、ダチに暴力出しただけでお前らは俺の敵だ。」
　声を低くすると全員が息を呑む
「それじゃあＡクラスは解散していいぞ。西村先生最初に報告したメンバーは来週からＡクラスで授業受けることになるけど、こっちもなるべく厳しく教えるからな。せめてＢクラス並には点数をあげさせるから。結衣は小学生の範囲からやるから覚えとけよ。お前中学生の問題より小学生レベルの問題の方が解けないんだから。」
「……えっと、逃げたら。」
「来週の料理当番俺だから弁当も全部蒟蒻が入った料理にする。」
「……そんなぁ～。」
　なぜか蒟蒻だけが食べれない結衣はがっかりと落ち込む
「ついでに明久もノーカロリーの物ばっかりにするからな。」
「……ちゃんと受けます。」
「康太はカメラの持ちこみ許可成績が悪いとおりない可能性があるぞ。」
「……許可取れたのか？」
「約束は守るさ。学校内の取引も、風紀に違反してなければいいらし

い。その代わり無償で学校側に何枚かは寄付してもらうことは前提の話になるがな。その際Ａクラスにいると木下や霧島の写真とってもいいことになっているぞ。条件付きらしいが。」
「……」
　すると指を上に付け足す。
「秀吉は演劇もっと上手くなりたいとは思わないか？」
「どういうことじゃ？」
「古典や現代文の有名作はよく演劇に使われる。特に文系教科は演技と関係があるんだよ。お前も演劇の時その役の気持ちを考えようとするだろ。」
「うむ。確かにそうじゃのう。」
「他にも源義経とかならお前も主役張れるんじゃないのか？」
「源義経？鎌倉時代のあの源義経かのう？」
「そうそう、諸説あるが牛若丸時代は日本史上トップ５に入る美形って言われているしな。まぁ、出っ歯の子男だったと言う供述もあるんだけど。その他にも古典だったら紫式部の源氏物語とか、お前が男性キャラを演じられそうなものが結構あるんだよなぁ。」
「本当かのう!!」
　すごい食いつきを見せる秀吉に俺は苦笑いをする
「まぁ、演劇の幅を広げるために国語や社会などを学んでみるっていうのはどうださらにその時代に何が起きたのか、そこを詳しく見ていくと演劇の背景、どのようなことを思っているのか。どんなことがあったのか詳しく分かると思うぞ。」
「……お兄ちゃん人をやる気にするの本当上手いよね。」
「うん。それも事実だから断りづらいんだよね。それも勉強と呼べるかわからないのに知識が増えていくから。」
「うっせ。それで赤点回避どころか明久なんかはＢクラス上位に運が良ければＡクラス並に点数上げただろ？」
「そうだけどさぁ。」
　俺はきっぱりと事実を告げる
「それじゃあとりあえず戦後交渉はこれにて終わりっと。勉強道具忘

れるなよ。今度補習時間まできっちり教えてやるから。」
「……任せとけ。」
「分かったのじゃ。」
「まぁ、明久が何であれだけ成績が上がったのか気になってはいたからな。俺も参加させてもらうぜ。」
　雄二の一言に俺は呆れてしまう
「お前霧島に教われよ。主席がワンツーマンで教えてくれるって言っているんだぞ。」
「……雄二。」
「貞操の危機を感じるんだよ。」
「いや、そうなったら木下の命令権を6ヶ月の休戦をやめてまで取り消すから。生憎押し付けられて恋人になるのは漫画やゲームでは面白いけど、実際自分や友達の身になるとしたら嫌だしな。」
　生憎そう言うトラブルはもってのほかだ
「まぁ、付き合ったとなれば別だけどなそれじゃあ帰ろうぜ。」
　あくびをするとすると結衣と工藤、木下がいないことに気づく
「そういやあいつらは？」
「命令権使うらしいですよ～。何か聞きたいことがあるらしいです。」
「……あぁ、そういや言っていたな。なら待っとくか。木下と約束しているし。お前らは？」
「俺たちは一旦教室に戻る。やることがあるし。」
「んじゃまた来週な。明久バイトで帰り遅れるから。」
「う～ん。僕も今日は久しぶりに家に帰ろうかな？もうそろそろ電気代払わないといけないから。」
「たまにはガス代と水道代も払えや。姉貴来ても知らないぞ。」
「その話はしないでよ～。それじゃあまた明日ね。」
「それで明日は来るのか。俺明日も出かけるからな。」
「分かったよ。合鍵持って行くから大丈夫。」
「明久よ。お主本当に入り浸りすぎじゃないかの。」
　と騒がしくFクラスのメンバーが出て行く
「…それじゃあ黒壁。」

「あぁ、お疲れ霧島。」
「私も帰りますね。」
「宮田もじゃあな。」
　すると教室には俺しかいなくなる
　俺はドリンクバーに向かいホットコーヒーをいれ少し持ってきた
小説に目を通し始めた